

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

——雑誌『児童研究』の分析を中心に——

A Historical Study on the Concept of “Mental Deficiency” in Japan before World War II (the First Report)

茂木 俊彦
高橋 智
平田 勝政

1. 研究の課題と方法

1970年代中頃から1980年代にかけてWHOによって疾病・障害概念の改定作業が進められてきた。その機運を受けてわが国でも障害概念の研究が開始され、一定の深化がはかれてきた。そのような中で、筆者らも、障害者教育学の存立基盤とその独自課題をよりいっそう明確にしていくためには、障害概念の検討が不可欠であると

いう認識にたつて教育学のアスペクトから一定の整理・検討をおこなってきた。^(註)そして、さらに障害別に概念をいっそう緻密に深めていく必要性を自覚した。本研究は、そのような課題意識にたつて、障害別の中でも、とくに今日その定式化に不十分さを残している「精神薄弱」概念をとりあげて、歴史的に戦前にまで遡って検討しようとするものである。

表1 「判別基準」中の「精神薄弱」概念

精神薄弱者の定義	基 準		教育的措置
種々の原因により精神発育が恒久的に遅滞し、このため知的能力が劣り、自己の身の事ごらの処理および社会生活への適応が著しく困難なものを精神薄弱とし、なお、これをその程度により、白痴・痴愚・魯鈍の三者に分ける	一・白痴	言語をほとんど有せず、自他の意志の交換および環境への適応が困難であつて、衣食の上に絶えず保護を必要とし、成人になつてもまったく自立困難と考えられるもの。(IQ25ないし20以下)	就学免除を考慮
	二・痴愚	新しい事態の変化に適応する能力が乏しく、他人の助けによりようやく自己の身の事ごらを処理しうるが、成人になつても知能年令六・七才に達しないと考えられるもの。(IQ20ないし25から50の程度)	遅滞の高度のもの：就学猶予を考慮、軽度のもの：養護学校または特殊学級
	三・魯鈍	日常生活にはさしつかえない程度にみづから身の事ごらを処理することができるが、抽象的な思考推理は困難であつて、成人に達しても知能年令一〇才ないし一二才程度にしか達しないと考えられるもの。(IQ50から75の程度)	養護学校または特殊学級
	付一境界線児	前項と正常児との中間にあるもの (IQ75から85の程度)	状況に応じ、養護学校または特殊学校 ^(註) または普通学級を決定
	る患付 精脳 神疾現 遅患在 滞を精 有神 す疾		就学猶予を考慮し、医療にゆだね、その結果により適宜な措置

(註) 文部省『特殊児童判別基準とその解説』(光風出版, 1953年6月), pp.14-16, をまとめて作成した。

その「精神薄弱」概念の変遷に関する先行研究は、その多くが、戦後の「精神薄弱」教育の基本的方向に大きな影響を与えた1953年6月の文部省通達「教育上特別な取扱を要する児童生徒の判別基準について」の中で定式化された「精神薄弱」概念を起点にして、それ以降の変遷をフォローするという形式に留まっている(表1を参照)。それだけに、通達において選択・採用された概念に至る歴史的形成過程にまで立ち入って検討しておくことは問題の所在を明らかにしていく上で重要である。そういう研究状況の中であって、戦前における「精神薄弱」概念の変遷にやや立ち入って検討を加えているものに北沢清司^(註2)、中村勝二^(註3)の研究がある。北沢は、精神医学領域における「精神薄弱」問題の成立・展開過程(1868~1944年)の解明との絡みで「精神薄弱」概念の変遷を取り扱い、中村は、主に明治40年代を中心とする時期の「低能児」概念を詳細に検討している。しかし、両研究は、多くの示唆を提供しているものの、研究の関心が「精神薄弱」概念の歴史的変遷のトータルな解明を意図・志向するものではないため、一領域・一時期に限られている。

そこで、本研究では、トータルな解明をめざす手始めとして、教育・心理・医学・社会事業(福祉)等の学際的に広範な領域にわたり、かつ、明治・大正・昭和の時代を貫いて長期に刊行された日本児童学会機関誌『児童研究』(第1巻・1898年~第42巻・1944年)を分析の対象として、^(註4)同誌において「精神薄弱」に関連する用語が、いつ頃からどのように使われはじめ、その意味内容がどういう歴史的変遷をたどったのか、を検討しようとするものである。そのことによって、戦前のわが国における「精神薄弱」概念の変遷のアウトラインをつかみ、今後の研究の手がかりを得ようとするものである。以下、本論では、『児童研究』誌における「精神薄弱」関係資料のうち、日本関係の資料を平田が、外国関係の資料を高橋が、それぞれ分担し、整理・検討をおこなった。^(註5)

(茂木俊彦)

〈第1節註〉

- 1). 茂木俊彦・平田勝政・高橋智：障害概念の教育学的検討、『人文学報』第171号，pp.101-137，1984年3月，東京都立大学人文学部。
- 2). 北沢清司：『精神薄弱者』施設における指導法の検討Ⅱ——わが国戦前の精神医学領域における雑誌論文を通しての『精神薄弱者』問題の展開について——、『精神衛生研究』第27号，pp.73-84，1980年11月，国立精神衛生研究所。

- 3). 中村勝二：我国における精神薄弱教育に関する一研究(3)，『三重大学教育学部研究紀要』第23巻(教育科学)，pp.33-39，1981年2月。
- 4). 雑誌『児童研究』および日本児童学会を中心とする戦前日本の児童研究運動の概観については、山本敏子「明治期・大正前期の心理学と教育(学)——子どもと教育の心理学的な研究の動向を手掛かりに——」(『東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室紀要』第13号，pp.92-105，1987年6月)を参照のこと。
- 5). 『児童研究』誌における「精神薄弱」関係資料については、すでに、清水寛氏によって詳細に分類・整理された目録がある(清水寛：日本精神薄弱関係文献目録——戦前その(二)『児童研究』誌上論文・資料——、『精神薄弱問題史研究紀要』第2号，pp.54-61，1965年3月)。この目録は「精神薄弱」の教育、心理学的研究、病理性的研究、統計的調査、雑報の5類型14分類に文献が整理され、その後の研究に重要な手がかりを提供してきた。しかし、当時の所蔵状況を反映してか、欠号部分の資料の遺漏が相当にあるという問題を残している。その点で本研究は日本児童学会による完全な複製版(第一書房刊)を使用しているため、その問題は克服されている。また清水氏は目録のまえがきで、『児童研究』誌上の「精神薄弱」関係資料が、戦前日本の「精神薄弱研究や精神薄弱問題の動向」を知る上で重要な資料的意義をもっていると指摘したが、資料整理にとどまって具体的に立ち入った分析にまで至っていない。その点でも本研究はささやかではあるが新しい試みである。

2. 「精神薄弱」概念の検討—日本の部—

(1) 日本関係資料の年次別・領域別の変化とその特徴

『児童研究』誌における「精神薄弱」関係資料のうち、日本関係の文献資料総数は、189件(→資料1の文献目録参照)であり、それを年次別・領域別に整理したものが表2である。^(註1)

まず、年次別に資料数とその分布状況をみると、表2が示すように、そこには、大きく3つの山(集合)が確認できる。それぞれを、第1期(1906~1918年)、第2期(1920~1927年)、第3期(1930~1942年)とすると、第1期は、1908年と1912年の2つを頂点とする明治末期から大正初期にかけての時期であり、第2期は、1922年を頂点とする1920年代の時期である。そして、第3期は、1930年代以降、とくに後半期を中心として盛り上

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

表2 『児童研究』誌における「精神薄弱」関係資料(日本の部)の年次別・領域別推移

年	年次別資料数と分布	医学(者)	心理学(者)	教育学(者)	特別学級関係者	「精神薄弱」者施設関係者	感化・教護教育関係者	社会事業	学校衛生	行政	調査	その他(不明)
1899 (M.32)	2				2							
1900 (M.33)	0											
1901 (M.34)	1											1
1902 (M.35)	2				2							
1903 (M.36)	0											
1904 (M.37)	0											
1905 (M.38)	0											
1906 (M.39)	1	1										
1907 (M.40)	6	1			3							2
1908 (M.41)	13	2	1		8	1					1	
1909 (M.42)	8	4	1	1		1	1					
1910 (M.43)	5	3			1							1
1911 (M.44)	4	1		1							1	1
1912 (M45/T1)	20	6		1		1		1			10	1
1913 (T. 2)	6	3			3							
1914 (T. 3)	6	4				1						1
1915 (T. 4)	7	4				1					1	1
1916 (T. 5)	9	2	1	1		4						1
1917 (T. 6)	8	2			2	2						2
1918 (T. 7)	3	2	1									
1919 (T. 8)	0											
1920 (T. 9)	2		1									1
1921 (T.10)	5	1	2	1								1
1922 (T.11)	13	4	2	1	1						3	2
1923 (T.12)	7				1	2			1			3
1924 (T.13)	3	1	1					1				
1925 (T.14)	3	2		1								
1926 (T15/S1)	6	2			1			1	1		1	
1927 (S. 2)	3	2									1	
1928 (S. 3)	0											
1929 (S. 4)	0											
1930 (S. 5)	2									1		1
1931 (S. 6)	3				1			1	1			
1932 (S. 7)	2								1			1
1933 (S. 8)	2				1	1						
1934 (S. 9)	3					2						1
1935 (S.10)	2	1										1
1936 (S.11)	7	2				2	1	1				1
1937 (S.12)	2				1							1
1938 (S.13)	7	2	1		1	1						2
1939 (S.14)	6	1	1								1	3
1940 (S.15)	4				2	1						1
1941 (S.16)	2						1					1
1942 (S.17)	3	1	1		1							
1943 (S.18)	0											
1944 (S.19)	1	1										
合計	189	55 (29.1%)	13 (7.0%)	7 (3.7%)	31 (16.4%)	20 (10.6%)	2 (1.1%)	3 (1.6%)	4 (2.1%)	7 (3.7%)	16 (8.5%)	31 (16.4%)

表3 「精神薄弱」関係用語の時期別変化

※重複を含む

用語 時期	精神薄弱児	精神低格児	劣等児	低能児	白痴児	痴愚	鈍児・遅鈍児	遅性児	痴児	精神発育停止者	異常児	特殊児童	特異児童	(特定不可能なもの)
第1期(総数101)	10	11	13	29	10	1	4	2	1	1	3	2	0	19
第2期(総数42)	4	1	2	19	1	0	0	0	0	0	3	3	0	7
第3期(総数46)	28	0	0	6	1	0	0	0	0	1	5	1	1	4

がる時期である。これら3つの時期は、いずれもこれまでの障害児教育史において確認されている「精神薄弱」教育及び保護の隆盛期と対応している。このことは、『児童研究』誌が、きわめてよく各時代状況を反映していることを物語っている。

すなわち、第1期は、主に1907年の文部省訓令第6号を契機として設置される特別学級の普及とドイツからの教育病理学の導入による精神医学領域からの対応を反映している。第2期は、第一次世界大戦後の大正デモクラシーの高揚を背景とする教育改造の気運の中で、文部省によって展開された「劣等児・低能児」教育振興策(資料1の目録No.110, 114, 115)と特別学級の全国的普及及びそれに伴う「精神薄弱」の心理学的把握(知能検査・教育測定等)が顕著となる時期を反映している。そして、第3期は、1930年代初頭の文部省体育課による「精神薄弱児童養護施設講習会」等による教育振興の動きの反映がみられるが、優生保護の思想・運動の怡頭により断種の是非が問題にされるなど、全体として、「精神薄弱」児の保護問題が中心的課題となる時代を反映している。

また、領域別にみると、医学領域が最も多く55件で全体の約3割(29.1%)を占め、第1期をピークとしつつ第2期、第3期を通じて全体の主流を形成している。それに比して、他の学問領域である心理学は13件(7.0%)で1割に満たず、教育学にいたってはさらに少なく、僅か7件(3.7%)にすぎない。このことは、学問的影響と同時に、「精神薄弱」概念の形成にあたっては医学(者)が主導性をもっていたことを物語っている。その一方、

実践領域では、特別学級(学校)関係の31件(16.4%)と「精神薄弱」者施設関係の20件(10.6%)が際立って多く、両者合わせて計51件(27.0%)で量的には医学領域に匹敵している。

(2) 「精神薄弱」関係用語の変遷と特徴

次に、「精神薄弱」に関係する用語の歴史の変遷の特徴をみてみよう。その主要な傾向をみるために用語の使用頻度を、前述の3つの時期に分けて整理したのが表3である。^(註2)

各時期の特徴をみていくと、まず第1期では、「低能児」「劣等児」が全体の約4割を占め、「精神薄弱児」(約1割)を圧倒している。また、この時期に特徴的なことは、多種多様な用語の登場である。例えば、「鈍児」「遅鈍児」「痴児」「遅性児」などがそれで、それらは第2期には消えていく。また、用語の使用がきわめて恣意的で、混同・混乱している点も特徴的である。例えば、「精神低格」=「低能児童」(目録No.15)、「低格児童」=「劣等児童」(目録No.18, 25)、「低格児童」=「低能児」(目録No.34)、「劣等児・低能児」=「精神薄弱児」=「遅性児」(目録No.36)などといった使用例がそれである。全体としてきわめて曖昧多義であった。

第2期では、「劣等児」が減少し、「低能児」の使用頻度が全体の約5割と多くなる。また、「精神低格」の使用がほとんどなくなり、非行少年等のいわゆる「性格異常児」が、「精神薄弱」概念から徐々に区別され、分離していったことが示されている。しかしながら、「精神薄弱児」という用語は、第1期と同様、まだ全体の約1割に

すぎない。

第3期では、「低能児」の使用頻度が激減して全体の1割強となり、逆に「精神薄弱児」の使用頻度が激増して全体の約6割を占めて、支配的となる。その転換のひとつの契機となったのは、1930年代初頭（1931～33年）に開催された文部省体育課主催の「精神薄弱児童養護施設講習会」（目録No.148, 150）であると考えられる。この講習会によって1920年代以降文部省の学校衛生（教授衛生）行政で使用されてきた「精神薄弱者の監督養護」にいう「精神薄弱」が公用語として周知徹底していったものと推察される。こうしてみると、「精神薄弱」という用語は、わが国では、1930年代に入ってから初めて知的遅れをもつ者を総称する用語として定着していったものである、と仮說的に言うことができる。

(3) 主要な「精神薄弱」概念の検討

次に、『児童研究』誌において展開された「精神薄弱」概念の主要な流れとその特質を検討していこう。

結論的に言えば、戦前日本における「精神薄弱」概念は、終始一貫して医学的概念がその主流をなし、それに心理学的概念が結合した形で成立・展開していったといえる。そのことを主な医学的概念の変遷を通して確認してみよう。例えば、①. 三宅鑛一^(註3)は、1908年論文（目録No.13）の中で「魯鈍・痴愚・白痴」を、「精神異常」のひとつと位置づけ、「精神発育制止者」と規定した。^(註4)②. 次に、森田正馬は、1914～15年論文（目録No.72）の中で、「低能児」＝「精神低能」を、「精神発育不良のもの」（＝先天的精神薄弱者）と「変質者」とに分け、さらに前者を構成するものとして「白痴」（≦年長じて後僅かに3歳乃至5歳の児童の知的発達に止まるもの）、「痴愚」・「魯鈍」（＝8歳乃至13歳）をあげた。③. 下って、樋口栄は、1935年論文（目録No.157）の中で「異常児」（狭義）を、「低能児」と「変質児」に分け、さらに前者を「白痴」（＝知能指数24以下）、「痴愚」（＝知能指数25～50）、「魯鈍」（＝知能指数51～80）とした。この知能指数をメルクマールにした心理学的概念を取り込んだ医学的概念は、1953年の文部省通達「教育上特別な取扱を要する児童生徒の判別基準について」にも継承されていると言ってよい。この医学的概念の一貫した特質は、1938年の雨宮保衛論文（目録No.168）においても「精神発育制止病、所謂低能児」という表現が使用されているように、疾病と障害の関係が不分明で、しかも「発育制止」という発達の限界性において概念を把握していく点にある。

しかしながら、『児童研究』誌には、そのような発達の

可能性の視点を基本的に欠いた把握とは異質な把握が、学校（学級）や施設の現場において直接「精神薄弱児」を前にして教育実践に携わる人々の中で探求されていた事実が反映されている。中でも注目されるのは、川田貞治郎（1879～1959年）の把握である。

川田は、渡米時代（1916.3～1918.11）に『児童研究』誌に書き送った1917年論文（目録No.98）の中では、「精神薄弱児」を、「智力年齢」と「智力数量」の両面から次のようにとらえていた。

「精神薄弱児」	—「白痴」(智能年齢2歳以下, 智能数量25以下)
	—「低能児」(" 3～7歳, " 25～49)
	—「 ^キ 「 ^ン 「 ^ン 愚」(" 8～12歳, " 50～75)

智力年齢
 \times 智能数量 = $\frac{\text{智力年齢}}{\text{實際年齢}} \times 100$ は、16歳を基準に算出した。

また、「劣等児」を智能数量「76乃至86」の者と把握し、「精神薄弱児」（＝智能数量75以下の者）と明確に区別してとらえようとしていた。ここにみられる概念把握は、いまだ既成の枠組みの中での試行錯誤にとどまっていた。しかし、帰国後、伊豆大島に設立（1919.6）した「精神薄弱」者施設・藤倉学園での実践（1920年代）を基盤に、1933年には、論文「臨床的白痴児の新分類の研究」（目録No.151）において、川田独自の概念把握を打ち出すに至る。すなわち、川田は、同論文において、「白痴児といふものに教育的可能性のある事につきましては従来実験的教育に於ては経験せられたことが少ない。従って研究者に於てもこれを教育不能と唱えたのであるが、これは実に驚く可き断定であると思ふ。余は此処に白痴のものにも十分に教育的可能性の存在する事を認め、これを分類することを初めた訳である。」と述べて、「精神薄弱児」（白痴）を、「新しく第一類型、第二類型、第三類型、第四類型、第五類型といふやうに、発達向上的に序列して」、「教育的治療」の可能性を追求しようとしていた。その5つの類型（＝新分類）とは、次のような内容をもつ規定である。^(註5)

- ① 第一類型：「教室外に於ける被教育的児童で絶対的保護を要する者」。現象的には、「(a)活動に充ち人間の所謂自己愛の発達期、(b)生理的变化の現象としては対象発見期、(c)一般に一段階的に進行する現象に順応する時期」にある者を指し、その「階級的進歩を促進せしめる為に細密なる観察的考慮を要する」者をいう。
- ② 第二類型：「附添なくとも教室に居られる者で自己の存在はあるが外界に対する対象的観念に欠ける者」をいう。

- ③ 第三類型：「教育的可能性の大分進める者で文字的教育期に属し教育的治療の対象たる本体である」者をいう。
- ④ 第四類型：「教室に居らなくとも正道に進み得る者で職業教育の本体である」者をいう。
- ⑤ 第五類型：「年長者にて常識的知識の所有者であり性格的欠陥者であるが可能性を一面に有している者」をいう。

この5類型は、いまだ概念としては熟していないが、前述の医学的概念とは異なる教育（学）的実践の概念として構築されようとしていた点に注目する必要がある。今後は、この概念形成の基盤になっている藤倉学園の実践と理論を、川田が残した著作・論文を通して検討し、5類型を軸とした教育的治療（学）の体系の解明が必要である。

こうしてみると『児童研究』誌は、戦後の「精神薄弱」概念につながる主要な流れの存在と同時に、それとは異質の概念形式の可能性の追求が存在したことをも我々に教えている。

(平田勝政)

〈第2節註〉

- 1). 資料1の目録（日本の部）は、「精神薄弱」概念をどうという学問的方法を用いて、あるいは実践的経験的アプローチで把握しようとしていたのか、言いかえれば、その概念認識の主体が、どういう学問領域（医学、心理学、教育学、社会事業・社会福祉学等）や実践領域（特別学級、施設、感化院・教護院等）に属しているかに注目して分類したものである。それ故、分類が年代によって異なる場合がある（例。目録No.20とNo.71の脇田良吉）。
- 2). 用語の特定にあたっては、1文献につき1用語を原則とした。1文献において複数の用語を使用している場合でも上位概念に注目して選択・特定している。
- 3). 三宅鑛一（1876～1954年）は、明治末期以後の精神医学関係者の中において、「精神薄弱」者問題研究の「第一人者」と評される人物である（『日本児童問題文献選集33白痴及低能児／三宅鑛一著』（日本図書センター、1985年）の北沢清司氏の「解説」（p.11）より）。
- 4). 前掲註3)の北沢解説によれば、同じ1908年に、三宅は、その代表的著書（但し松本高三郎と共著）のひとつである『精神病学診断及治療学』の「第15章 精神發育制止」において、「白痴・痴愚・魯鈍」の3分類を提起したという。それまでは、わが国の本格的な精神医学教科書である呉秀三の『精神病学集要 前編・後

編』（1894年・1895年）が、「精神發育制止症＝白痴」を、「白痴」（狭義）と「痴愚」とにわけとらえる2分類であった。その点で、三宅の3分類は、新しい提起であり、呉もその後三宅の分類を結局採用するに至ることを考えると、『児童研究』誌は、「精神薄弱」概念の変遷における重要な画期に位置する事実を反映しているといえる。

- 5). 簡潔な表現を期すため、引用は、『応用心理研究』第2巻第3号（1934年8月）所収の川田論文「新に精神薄弱児の診断と分類と治療」によった。

3. 「精神薄弱」概念の検討—外国の部—

(1) 外国文献資料の年次別・国別・領域別の特徴

『児童研究』誌に掲載された諸外国についての「精神薄弱」問題を対象とした文献総数は327件であり（後掲の資料3の文献目録を参照。なお資料3では参考のため「精神薄弱」問題に関連する文献も含めているので340件と多少増えている。）、それを年次別・領域別・国別に分類したものが表4である。

まず文献資料数の変化をみると、諸外国の「精神薄弱」問題の研究、動向、情報の紹介・翻案の過程には、1910年代初頭（明治末～大正初期、ピーク：1910年）、1920年代初頭（大正10年代、ピーク：1923年）、1930年代中期から後期にかけての、3つの量的増加の山（集合）が形成されている。このことは本稿第2節「日本の部」の検討においても確認されており、またこれまでの障害児教育史研究において指摘されてきた「精神薄弱」者教育・保護をめぐる諸営為の高揚の時期と一致するものである。それぞれを第1期（1898～1918年）、第2期（1919～1929年）、第3期（1930～1944年）として、その各時期の外国文献資料の内容の特徴を簡単に述べると次のようである。

第1期はドイツを中心として、補助学校（学級）・「白痴」施設の制度や教育内容・方法、教育病理学・治療教育学等の学説・理論、「精神薄弱」（者）についての医学・病理学・生理学的な性格規定や原因論等、「精神薄弱」に関わる多方面の知識・情報が数多く紹介された時期である。

第2期は、紹介国の力点がドイツよりアメリカ・イギリスに移り、アメリカを中心とする児童研究運動・教育測定運動の高揚を背景に、心理学とくに知能測定的面からの「精神薄弱」の概念把握・特徴づけに関心が集中し、さまざまな論者の知能による児童分類、諸検査法が紹介された時期である。

第3期は、戦時体制を背景として、優生学の観点から家系調査（犯罪、「精神薄弱」、近親結婚等）・遺伝・断種の問題が大きく取り上げられている。これまでの中心的な論議的であった「精神薄弱」の本質・原因・分類定義という問題は軽視ないし捨象され、「精神薄弱」者の撲滅あるいは社会防衛の観点からの消極的保護（隔離収容）が中心的テーマとなった時期である。また紹介国も再びドイツに力点が移されている。

さて次に文献資料を領域別にみると⁽⁴¹⁾、医学・病理学領域が105件で最も多く、全体の3割強（32.1%）を占め、第1期をピークとしつつ、第2・第3期を通じて全体の主流を形成している。心理学（60件、18.3%）と児童研究（41件、12.5%）はその学問的成立と関連して、わが国には第2期を中心として紹介される。この両者は、先行領域の医学・病理学における「精神薄弱」研究から大きな影響を受けつつも、「精神薄弱」（者）の身体的特徴、分類定義、知能、心性、活動性、人格・徳性、学習、発達、環境等の新たな独自の諸側面から「精神薄弱」像の解明にアプローチしており、第2期以降、医学・病理学領域とは別のひとつの潮流を形成している。一方、教育の領域は82件（25.1%）と医学・病理学について文献資料数は多いが、その主たる内容は教育・保護制度、教育内容・方法等の紹介であり、教育独自の視点から「精神薄弱」概念を問題としたり、その解明に取り組んでいるものは皆無に等しい。以上のことから、「精神薄弱」概念の形成にあたっては、医学・病理学が先導して主流を形成し、後続の心理学、児童研究はそれを補完するとともに新たな意味づけをしていったことを推論できる。

(2) 「精神薄弱」関係用語の年次変化

『児童研究』誌の外国文献に登場する「精神薄弱」関係用語は80種類もの多岐にわたる。それを全て提示するスペースはないが、従来また今日において使用されているさまざまな用語をほぼ網羅しており、たとえば「知能障碍（害）」（初出：1939年）、「精神発達遅滞」（1903年）、「知能遅滞」（1937年）等の比較的新しい用語もその中に含まれている。

さて表5は、80種類の中から使用頻度の多い用語の上位14種類を取り上げて、その年次変化を示したものである。⁽⁴²⁾表6は関係用語の使用頻度を、前述の3つの時期区分ごとに整理して、その推移をみようとしたものである。では表5・表6の特徴を概括してみよう。

まず第1期では、1908年に「精神薄弱」が初出し、用語の約4分の1を占めて当初から高い使用頻度を示すが、これと主として精神医学者による医学・病理学領域

の外国研究・動向の紹介によるものである。数の多い「白痴」や「精神低格」もほぼ同様である。「低能」も14.9%と高い使用率であるが、しかし前節の「日本の部」の場合には、この時期、「低能・劣等」が全体の約4割を占めて「精神薄弱」（約1割）を圧倒していることと比較して、「精神薄弱」の当初からの高い使用頻度はきわめて対照的である。この点については次項で検討するが、執筆者、紹介・翻案者の専門領域を反映しているものと考えられる。

第2期以降は「精神薄弱」の占める割合がますます増加し、1930年代に入ると行政、法制度、学界・アカデミズム等のフォーマルな面において「代表性」を正式に付与されるのである。「低能」と「白痴・痴愚・魯鈍」の用語も一定の使用頻度を示しているが、その使用方法をみると、前者は通俗的な呼称として（執筆者・紹介者が専門研究者でない場合にも多々みられる）、また後述するように主として教育の領域で使われている。後者は「精神薄弱」の下位の知能程度による分類カテゴリーとして用いられている。なお「精神薄弱」と「精神低格」ないし「低格」が明確に区別・分離されていくのも第2期以降であり、この時期における精神医学や感化・教護事業の大きな発展によるものである。

(3) 領域別にみる「精神薄弱」関係用語の変化

表7は各領域別における「精神薄弱」関係用語の時代的特徴をみるために、それぞれ15年ごとの3期に区分して、使用される用語（14種類）の各領域内の変化を示したものである。

とくに際立った領域別の特徴を示しているのが「教育」と「医学・病理学」の領域である。「教育」では「低能・劣等」の用語の占める割合が高い。このことは外国文献の紹介・抄訳者の大半が精神医学・病理学者、心理学者であったにもかかわらず、1920年代（第2期）初頭までは「精神薄弱」児教育を「劣等児・低能児」教育と呼称するのが、文部行政から小学校特別学級等の実践までにおいて最も一般的であったことを反映している。しかし1920年代中期から1930年代（第3期）以降は、前節で指摘されているように、文部省の学校衛生行政を中心に、精神医学および心理学の「精神薄弱」研究の成果を取り入れつつ「劣等・低能」児教育の概念・内容・用語等の再検討と整理が行われ、用語としては「精神薄弱」に集約されていく。この背景には学校衛生主事会議（1916年創設）や全国連合学校衛生会総会（1922年創設）の開催と論議があり、そこでの学校衛生主事・学校医ら医学関係者の意思や働きが大きい。⁽⁴³⁾

表4 『児童研究』における「精神薄弱」関係資料(外国の部)の年次別・国別・領域別推移

年	資料数	領域別資料数						国別資料数							
		教 育	児童研究	心 理 学	医学・病理学	社会事業	調査・統計他	ドイ ツ	アメリ カ	イギリス	フランス	イタリ ア	ベルギー	その他	不 明
1890 (M31)	1		1						1						
99 (M32)	0														
1900 (M33)	2			1	1			2							
01 (M34)	3	2	1					2	1						
02 (M35)	0														
03 (M36)	3	1		1	1			3							
04 (M37)	1		1						1						
05 (M38)	1			1						1					
06 (M39)	0														
07 (M40)	3		2	1					1	1	1				
08 (M41)	25	10	1		11		3	22						1	2
09 (M42)	17	2	1	1	9	3	1	10		1				5	1
10 (M43)	27	3	1	4	16	1	2	18	1	1	1	1	1	3	1
11 (M44)	18	5	2	2	6	2	1	15		1	2				
12(M45/T1)	14	2		5	4	3		11	2			1			
13 (T 2)	13	6	1	1	4		1	10	1					2	
14 (T 3)	19	11		2	4	1	1	13	3			1	1	1	
15 (T 4)	6	2		1	2	1		4		1					1
16 (T 5)	0														
17 (T 6)	1		1								1				
18 (T 7)	3		2	1					2	1					
19 (T 8)	2		1		1					2					
20 (T 9)	6	1	1	2	1	1		1	5						
21 (T10)	12	1	4	1	5	1		2	6	2				1	1
22 (T11)	11	3	1	4	1	2		4	5		1				1
23 (T12)	16	6	1	4	3	1	1	2	12	2					
24 (T13)	11	2		2	3	1	3	2	4	5					
25 (T14)	9	6		2	1			1	4	3	1				
26(T15/S1)	11	2	2	2	5			2	5		1			1	2
27 (S 2)	7	1		3	2	1		2	2			2			1
28 (S 3)	7	2	2	2		1		3	3	1					
29 (S 4)	11	2	1	4	4			4	5	1					1
30 (S 5)	4	2	1	1				1	1	1				1	
31 (S 6)	8	1	2	3	2			3	2	1				2	
32 (S 7)	8	1	1	2	4			2	3	1					2
33 (S 8)	6	1	2		2		1	5		1					
34 (S 9)	4		1	1	2			2	2						
35 (S10)	7			3	2	2		6	1						
36 (S11)	7	1	1		4	1		5		2					
37 (S12)	5		1	2	1	1				2			1	2	
38 (S13)	4	2	1			1		2			1	1			
39 (S14)	5	2	1	1	1			1	2	1				1	
40 (S15)	3	1	1				1	1			1				1
41 (S16)	3		2		1			1	1						1
42 (S17)	3	1			2			1							2
43 (S18)	0														
44 (S19)	0														
合 計	327	82	41	60	105	24	15	163	76	31	11	6	3	20	17

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

表5 「精神薄弱」関係用語の年次変化

年	精神薄弱	低能	白痴	痴愚	魯鈍	精神低格	精神欠陥	劣等	低格	遅鈍	痴呆	癡癡	愚鈍	精神低能	その他	合計
1898 (M31)															1	1
99 (M32)																0
1900 (M33)			1												1	2
01 (M34)			1							1					3	5
02 (M35)																0
03 (M36)			2												2	4
04 (M37)					1											1
05 (M38)										1					1	2
06 (M39)																0
07 (M40)								1					1	1	1	4
08 (M41)	8	6	6	1		4			2	1	2				10	40
09 (M42)	3	5	5	2						1				1	6	23
10 (M43)	13		4	1	2	4			6	2	1				10	43
11 (M44)	10	5	4	3	1	3					1	2		3	8	40
12(M45/T1)	6	1													3	10
13 (T 2)	2	6	2	1								2			2	15
14 (T 3)	4	8		1	1	4									1	19
15 (T 4)	5															5
16 (T 5)																0
17 (T 6)							1									1
18 (T 7)		2				1	1			1					1	6
19 (T 8)	2															2
20 (T 9)	4	1	2	2	2		2	1							1	15
21 (T10)	9		3	2	2	2	2			2	1				1	24
22 (T11)	5	4	1	2	1	1		1		1					2	18
23 (T12)	3	5	1	1	2		2	4				1			2	21
24 (T13)	6	6	2	3	2		2						2		4	27
25 (T14)	5	1	1	1	1		1	3	1						4	18
26(T15/S1)	1		1	1	1	1	1	2			1		2		4	15
27 (S 2)	6											1	1		1	9
28 (S 3)	4	2	1	1	2										3	13
29 (S 4)	6		1				2	1					1		3	14
30 (S 5)	3		1	2				1								7
31 (S 6)	2	2				1				1					2	8
32 (S 7)	4		2				1		1		1				2	11
33 (S 8)	5				1				1							7
34 (S 9)	3		1	1		1						1				7
35 (S10)	6	2										3			1	12
36 (S11)	5	1		1	2		2				1					12
37 (S12)	1			1	1		1			1					3	8
38 (S13)	4	1			1											6
39 (S14)	3														3	6
40 (S15)	1		1													2
41 (S16)					2										1	3
42 (S17)		2	1													3
43 (S18)																0
44 (S19)																0
合計	139	60	44	27	25	22	18	14	11	12	8	10	7	5	87	489

表6 「精神薄弱」関係用語の時期別変化

時期	用語	精神薄弱	低能	白痴	痴愚	魯鈍	精神低格	精神欠陥	劣等	低格	遅鈍	痴呆	癩癩	愚鈍	精神低能	その他
第1期 (1898~1918)	文献資料数 221件	51 23.1%	33 14.9	25 11.3	9 4.1	5 2.3	16 7.2	2 0.9	1 0.5	8 3.6	7 3.2	4 1.8	4 1.8	1 0.5	5 2.3	50 22.6
第2期 (1919~1929)	文献資料数 176件	51 28.9%	19 10.8	13 7.4	13 7.4	13 7.4	4 2.3	12 6.8	12 6.8	1 0.6	3 1.7	2 1.1	2 1.1	6 3.4	0 0	25 14.2
第3期 (1930~1944)	文献資料数 92件	37 40.2%	8 8.7	6 6.5	5 5.4	7 7.6	2 2.2	4 4.3	1 1.1	2 2.2	2 2.2	2 2.2	4 4.3	0 0	0 0	12 13.0
総計	489件	139 28.4%	60 12.3	44 8.9	27 5.5	25 5.1	22 4.5	18 3.7	14 2.9	11 2.2	12 2.5	8 1.6	10 2.0	7 1.4	5 1.0	87 17.8

「教育」の領域において「白痴・痴愚・魯鈍」や「精神低格・低格・痴呆」等の用語数が少ないのは、「医学・病理学」の領域に比して対照的である。そもそもこれらの用語は法医学、精神医学との関連で成立したからである。とくに「白痴」については、わが国の1870年代以降の近代国家体制の確立過程において法律上の欠格条項として登場してくる。それは一連の地方民会規則や三新法の中の府県会規則（1880年）において、選挙権・被選挙権の欠格条項として「白痴」条項が取り入れられていた。すなわち「精神薄弱」者が近代的市民権のひとつである参政権を持ちえない「欠格者」としての法的規定がなされたが、法医学に対してはその際の「白痴」の診断が要請されていたのである。^(註4)

さらに1900年代に入り、天皇絶対制国家の確立・強化過程において、「精神薄弱」者の浮浪・非行・犯罪の予防が社会問題化して、その一環として「精神病患者監護法」・「感化法」・「行政執行法」（以上は1900年制定）等の公布による治安・社会防衛対策がとられるが、こうした状況の中で法医学・精神医学に対する社会的要請がますます強まるのである。

その背景には1890年代以降のドイツ精神病学の紹介・導入の中で、「白痴」は精神分裂病・躁鬱病とならんで主要な精神病として位置づいていたことを指摘でき、それとともに呉秀三の「精神发育制止病＝白痴」（『精神病学集要・後編』、1895年）に代表される「不治永患」観にもとづいた「精神薄弱」者理解が支配的であったことで

ある。^(註5)

なお精神医学・病理学においては用語も第2期までは「白痴」が主流であり、「白痴」研究の内容は分類論、症状論、原因論が中心であって、治療法までふみ込んだものはごく少数で、こうした研究動向は外国研究の紹介・導入のあり様に大きく反映している。

各領域に共通することであるが、全体の動向としては前述したように、1920年代において概念・用語の検討・整理がすすみ、第3期以降は「精神薄弱」に集約・統合されていくことが、「外国の部」においても確認することができる。

(4) 諸外国の主要なる「精神薄弱」概念

次に「児童研究」誌における外国の主要なる「精神薄弱」概念の規定について検討する（資料2を参照のこと）。資料2を通覧すると、全体として、「白痴・痴愚・魯鈍」の3類型が基本であり、それは「医学・病理学」の領域において先行し、その後で「心理学」・「児童研究」・「教育」の領域に取り入れられている。しかし3類型の内容をもう少し詳細にみるならば、「精神薄弱」概念のとらえ方に領域別の特徴が出ている。

「医学・病理学」では、〈文献5〉の「先天的低能ニシテ器質的ノ病的欠損」「思考器官ニ異常アルカ又ハ種々ナル種類ノ合併症アリテ智的低格」のように、先天的な器質上の病的欠陥ないし大脳の異常による知能低下と生理・病的にとらえる傾向が強い。

表7 領域にみる「精神薄弱」関係用語の変化

60	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他
		遅鈍 精神低格 痴愚 白痴						
		劣等						
		精神薄弱						
50	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
遅鈍 精神低格 痴愚 白痴								
劣等								
精神薄弱								
40	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
遅鈍 精神低格 痴愚 白痴								
劣等								
精神薄弱								
30	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
遅鈍 精神低格 痴愚 白痴								
劣等								
精神薄弱								
20	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
遅鈍 精神低格 痴愚 白痴								
劣等								
精神薄弱								
10	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
遅鈍 精神低格 痴愚 白痴								
劣等								
精神薄弱								
1898(M31)~ 1912(M45/T1)	1913(T2)~ 1927(S2)	1928(S3)~ 1944(S19)	1898-1912	1913-1927	1928-1944	1898-1912	1913-1927	1928-1944
教 育			児 童 研 究			心 理 学		

60	痴呆	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他
	低能							
	低格							
	痴愚							
50	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
痴愚								
精神低格								
精神低格								
40	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
痴愚								
精神低格								
精神低格								
30	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
白痴								
低能								
低能								
20	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
白痴								
白痴								
低能								
10	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
精神薄弱								
精神薄弱								
精神薄弱								
1898-1912	1913-1927	1928-1944	1898-1912	1913-1927	1928-1944	1898-1912	1913-1927	1928-1944
医 学 ・ 病 理 学			社 会 事 業			調 査 ・ 統 計 他		

「心理学」では〈文献4〉・〈文献14〉のように、概念形成、判断力、記憶、行動、注意、情緒等の心理的特性の側面からの「精神薄弱」像への接近がみられ、また〈文献13〉のように精神の「発育」ないし「発達」という概念でとらえようとしているのもこの領域の特徴である。

「教育」では〈文献9〉・〈文献10〉にみられるように、特殊学校・特殊学級における教育・訓練の必要なもの、そのことによって「有用な自活スル市民」となりうるものという「能力主義的人材配置計画」の観点からのとらえ方が主流をなしている。しかし〈文献16〉のように、「白痴・痴愚・魯鈍」の3類型を「かゝる分類は、治療教育上の目的から見て不充分である。治療教育を行はむがためには、欠陥の質的構造の特徴を仔細に示すことが肝要である」と批判し、「記憶、注意、理解、類別作用、結合・構成作用、推論」の検査をもとに5類型の分類が提起されている。その内容は、先の能力主義的な観点ではなく、子どもの身体や教育環境の状態を十分に考慮し、障害や発達に応じた治療教育を行なっていくという、実践的で注目すべき提起である。

しかし全体として、諸外国の「精神薄弱」概念の内容や紹介方法を検討してみると、欧米（とくにアメリカ、ドイツ、イギリス）の先駆的な「精神薄弱」者関係諸法令・制度における分類規定や、学界・研究レベルで一定確定していた「精神薄弱」概念の紹介がきわめて不充分である。その主要な要因として外国文献の抄訳・抄録の際に十分な検討がなされておらず、紹介の仕方に目的・意識性や一貫性を欠いていることを指摘できる。『児童研究』誌は諸外国の情報・知識や動向をいち早く紹介することを目的としていたが、その反面、紹介内容はきわめて雑駁で断片的であり、外国文献の検討を通して戦前における「精神薄弱」概念の到達点や日本の概念形成への影響までの深く立ち入った分析までは到底いたらなかった。この点については検討素材を変えての、今後の主要な作業課題としたい。 (高橋 智)

〈第3節註〉

- 1). 外国文献の領域別分類については、先進欧米諸国において第2次大戦前に「精神薄弱」者問題の原因解明や社会的対策を含んで成立していた学問と実践を、教育(学)、児童研究、心理学、医学・病理学、社会事業の5領域に分け、それ以外の文献は調査・統計的なものが多数を占めているので調査・統計他とした。日本文献の分類では主に人物の領域別所属を軸に分けているが(第2節註1)参照)、外国文献の場合、短い抄訳・

抄録等の紹介が大多数なのでそういう分類は困難であり、内容を検討することで分類した。欧米諸国では「精神薄弱」者問題に関係する学問や実践は、戦前においても相当程度に分化・発展していたので、分類上において大きな困難は生じなかった。

- 2). 用語の選択方法としては、各文献の中で論者(または紹介者、抄訳(録)者)が「精神薄弱」についての包括的概念ないし用語として使用していると思われるものを、1文献にひとつを原則として特定してカウントした。しかし確定できずに複数を選択した場合もある。
- 3). 杉浦守邦、田中克彦：大正期の特殊教育の勃興と学校衛生思想、『精神薄弱問題史研究紀要』第20号、pp. 3-31、1977年2月。
- 4). 石島晴子：わが国における「就学猶予・免除規定」の成立に関する一考察、『精神薄弱問題史研究紀要』第24号、pp.13-37、1979年10月。
- 5). 北沢清司：戦前の精神医学・精神衛生領域における精神薄弱者問題の展開、津曲・清水・松矢・北沢(編著)『障害者教育史』、pp.217-222、川島書店、1985年5月。

4. 結 語

本稿は戦前のわが国における「精神薄弱」概念の変遷のアウトラインをつかむという予備的研究の水準の域を出ていないが、『児童研究』誌における日本と外国の「精神薄弱」関係資料の検討を通しての簡単なまとめと、今後の本格的な「精神薄弱」概念研究をすすめる上での具体的な作業課題について述べる。

「精神薄弱」概念の変遷の特徴であるが、第1に、用語の新たな登場と消失や、概念・分類定義の検討・整理の集中的な作業が行われた時期は、既述の3つのピークの時期に対応しており、そのことは「精神薄弱」者教育・保護をめぐる政策・実践・運動・研究の高揚のダイナミズムの中で「精神薄弱」概念が形成されてきたことを示している。

第2に、戦前における概念形成において、医学とくに精神医学・病理学の研究者が主導的な位置と役割をはたしており、他の学問領域は基本的にそれに規定されていたことである。医学的な「精神薄弱」概念は、クレペリンの「精神薄弱」の分類を基本としつつ新たに知能指数をメルクマールとした心理学的概念を取り込んで概念の主流を形成し(戦前における到達点である)、それは戦後の1953年文部省通達に代表される「精神薄弱」概念へ

と継承されていくのである（この点の詳細な検討は精神医学関係雑誌の分析を中心にして続報で行なう）。

第3に、しかしながら川田貞治郎の「白痴」の5類型の事例に示されているように、発達の限界性において「精神薄弱」をとらえている上述の主流的な概念に対して、それをうち破ろうとする、発達と教育の可能性を軸とした斬新な「精神薄弱」(者)理解と概念が、特別学級や施設の実践の中で構築されようとしていたことに注目したい。そして戦後はまさに教育と福祉の現場実践において、発達保障にもとづく「精神薄弱」概念が提起されてくるのである。

さて今後の研究作業であるが、以下のプランをたて、既にその一部に取り組んでいる。

①「精神薄弱」関係の図書及び雑誌論文・資料の調査・収集・整理の作業を行なう。雑誌では、下記の各分野における主要雑誌にあたる。

・医学—「国家医学会雑誌」「中外医事」「医学中央雑誌」「精神衛生」「神経学雑誌（精神神経学雑誌に改題）」「脳（精神と科学に改題）」他。

・心理学—「心理研究」「日本心理学雑誌」「心理学研究」「教育心理研究」「応用心理」「応用心理研究」他。

・教育学—「教育時論」「教育学術界」「教育実験界」「教育界」「教育研究」他。

・社会事業—「社会事業」「社会事業研究」「社会福利」「児童保護」「育児雑誌」「感化教育」他。

②上記4分野の雑誌における「精神薄弱」関係資料を、年次別・領域別に分類・整理し、統計的処理を加えながら、「精神薄弱」の医学的、心理学的、教育学的、社会事業的概念把握の変遷と相互の関係を比較検討し、「精神薄弱」概念の変遷の全体的な流れとその特質を解明する。

③上記の検討作業の過程で、「精神薄弱」概念の変遷史上に重要な役割を果たした人物を学問及び実践領域からそれぞれ抽出し、その人物に関する著作・論文・資料の調査・収集・分析の作業を行って、人物を中心に「精神薄弱」概念の形成過程とその到達点を解明する。

④以上に整理・分析したデータにもとづいて「精神薄弱」概念の通史的考察を行い、さらに教育学のアスペクトからの概念の定義を行う。

なお本稿は東京都立大学大学院1986年度茂木俊彦ゼミ「わが国における『精神薄弱』概念の歴史的研究」の成果にもとづき、日本特殊教育学会第25回大会（1987年10月10日～11日、岡山大学）で報告した内容に加筆修正したものである。ゼミでの共同討議をふまえて、茂木（人文学部助教授）、高橋（人文学部助手）、平田（大学院博

士課程）が執筆を分担した（茂木—1節；高橋—3節・4節，資料2・3；平田—2節・4節，資料1）。共同研究者は、宗沢忠雄（研究生）、小山泉子（大学院聴講生）の兩名である。

（高橋 智，平田勝政）

〈資料1〉

『児童研究』誌における「精神薄弱」関係文献目録（日本の部）

(分類略号)

- *教育学者→教育 *特別学級（学校）関係者→学校 *行政関係者→行政
 *心理学者→心理 *感化院・感化教育関係者→感化 *調査研究→調査
 *医師・医学者→医学 *社会事業・社会福祉学者→社会 *その他・不明→他
 *施設関係者→施設 *学校衛生関係者→衛生

平田 勝政 作成

No	著者名	題名	記事 類型	巻号	発行年月	分類
1	川船君重	社会の暗黒面に於ける児童	研究	1-6	1899-4	学校
2	安日長雄	困難なる生徒につきての研究	紹介	2-4	1899-12	学校
3	中島与三郎	鈍児（男女百四十八名について）の病気類型別表並に体格上の所見	紹介	4-5	1901-9	他
4	樋口かね子	遅鈍児教授の経験に就きて	研究	5-1	1902-3	学校
5	樋口かね子	師弟の愛に就きて	研究	5-3	1902-5	学校
6	富士川 游	教育治療学	研究	9-4	1906-4	医学
7	岩内 誠一	劣等児童に就きての調査（1～3）	研究	10-1～3	1907-1～3	他
8		劣等児童研究会	彙報	10-2	1907-2	他
9	三浦政丸	劣等児童の原因調査		10-2	1907-2	学校
10	鈴木治太郎	劣等生の特別教授		10-9	1907-9	学校
11	鈴木治太郎	劣等児教育の方法		10-10	1907-10	学校
12	石川貞吉	白痴に就て	彙報	10-11	1907-11	医学
13	三宅 鑣一	小児期に於ける精神異常に就て	原著	11-1.2	1908-1.2	医学
14		劣等児童取扱法	雑報	11-2	1908-2	学校
15	高橋英之助	精神低格の児童	摘録	11-3	1908-3	学校
16	中川益次郎	劣等児童の救済法	摘録	11-3	1908-3	学校
17		異常児童救済法内規	雑報	11-3	1908-3	学校
18		低格児童教育法	雑報	11-5	1908-5	学校
19	宮部次郎吉	低能児の減数法	雑報	11-5	1908-5	学校
20	脇田良吉	教育上より観たる児童の分類	原著	11-6	1908-6	学校
21		特殊教育実験	雑報	12-1	1908-7	心理
22	富士川 游	（新刊紹介）低能児教育法	雑報	12-1	1908-7	医学
23	大田代久穂	低格児童の徴候		12-3	1908-9	学校
24	石井亮一	白痴に就て	雑報	12-4	1908-10	施設
25		大阪府に於ける低格児童の調査	雑報	12-6	1908-12	調査
26	元良勇次郎	注意練習の実験に就て	原著	12-8	1909-2	心理
27	石井亮一	痴児に就て	原著	12-10	1909-4	施設
28	吉田熊次	個性と教育	広告	12-11	1909-5	教育
29	池田千年	元良氏視覚及び聴覚操練器試用成績	原著	12-11	1909-5	感化
30	榊保三郎	異常児の分類及低能児なる語の意義	広告	12-12	1909-6	医学
31	富士川 游	トリューベール氏教育院	叢談	13-1.3	1909-7.9	医学
32	池田隆徳	低格児童の智力（1）（2）	原著	13-4.5	1909-10.11	医学
33	小峯茂之	特殊児童の身体的症状	原著	13-5.6	1909-11.12	医学
34	小林佐源治	低格児童の教育に就て（1）（2）	原著	13-8.9	1910-2.3	学校
35	笠原道夫	ブルスヴィーユを吊す	叢談	13-8	1910-2	医学
36	富士川 游	児童研究の範囲	原著	13-9	1910-3	医学
37	千日亮	児童の養護と教育に関する万国連合会議	叢談	13-11	1910-5	他
38	榊保三郎	小学校児童精神能力測定調査成績（1）～（4）	叢談	14-3.4 -5.7	1910-9～11 1911-1	医学
39	樋口長市	低能児教育実験談	摘録	14-8	1911-2	教育
40	三宅 鑣一	病的魯鈍者に就て	摘録	14-11	1911-5	医学
41	彌瀬彦蔵	異常児の精神試験	摘録	15-3	1911-10	他
42		特殊教育調査会	雑報	15-4	1911-11	調査

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

No	著者名	題名	記 類 事 型	巻 号	発 行 年 月	分 類
43		小学児童不就学者数	雑報	15-6	1912-1	調査
44		大阪市低能児調査	雑報	15-6	1912-1	調査
45		新潟市低能児等調査	雑報	15-6	1912-1	調査
46		広島県に於ける低能児童数	雑報	15-6	1912-1	調査
47		呉市の低能児	雑録	15-7	1912-2	調査
48		新潟県の異常児及其取扱	雑録	15-8	1912-3	調査
49		群馬県低能児童数	雑録	15-8	1912-3	調査
50		岡山県低能児童教育	雑録	15-9	1912-4	調査
51		低能児教育調査(東京市)	雑録	15-9	1912-4	調査
52	石川 貞吉	身体虚弱, 不具及精神低格児童の保護	雑録	15-10	1912-5	医学
53	脇田 良吉	低能児の道德観	雑録	15-10	1912-5	施設
54		特殊児童の教育	雑録	15-11	1912-6	調査
55	杉江 薫	痴愚の責任能力に就て	雑録	15-11	1912-6	医学
56	三宅 鑛一	低能児に関する二三の事項	雑録	15-11	1912-6	医学
57	小河 滋次郎	児童保護の法制關係に就て (1)(2)	原著	15-11.12	1912-6.7	社会
58	池田 隆徳	白痴の原因	摘録	15-12	1912-7	医学
59	福田 美明	先天性神経病及精神病の遺伝病關係	摘録	16-2	1912-9	医学
60	三田 谷啓	精神的能力の遺伝	叢談	16-3	1912-10	医学
61	原口 つる子	精神薄弱児の心理学的研究	叢談	16-4	1912-11	他
62	樋口 長市	低能児の発音不明症について	原著	16-5	1912-12	教育
63	田島 真治	低能児の言語, 挙動, 運動, 習癖の記載	摘録	16-6	1913-1	学校
64	田島 真治	低能児の情意作用に就て	摘録	16-9	1913-4	学校
65	小林 佐源治	低能児童教育の効果	雑録	16-11	1913-6	学校
66	呉 秀三	精神智力の検査(1)~(3)	講義	17-1~3	1913-8~10	医学
67	笠原 道夫	一, 二教育病理学的事実に就て	原著	17-5	1913-12	医学
68	藤原 薫	劣等生の衛生的観察	摘録	17-5	1913-12	医学
69	三宅 鑛一・ 杉江 薫	在姫路陸軍懲治隊懲治卒の精神状態視察報告書 (1)(2)	原著	17-7・10	1914-2.5	医学
70	大澤 宏・ 寺島 毅一	白痴の脳の供覧	摘録	17-8	1914-3	医学
71	脇田 良吉	教育学上より見たる児童の分類	雑録	17-12	1914-7	施設
72	森田 正馬	低能児の教育に就て (1)~(8)	叢談	18-1~6 -8.9	1914-8~12 1915-1~4	医学
73		低能児と耳鼻疾患	雑録	18-2	1914-9	他
74	石川 貞吉	精神及び身体低格児童の保護(1)~(4)	原著	18-2~5	1914-9~12	医学
75	竹鼻 尚友	養育院に於ける児童の身心の状態に就て	原著	18-6	1915-1	施設
76	三田谷 啓	補助学校設立の急務	評論	18-10	1915-5	医学
77	三田谷 啓	学齡児童智力検査法に就て	叢談	18-10	1915-5	医学
78	田村 亀太郎	小学校の優等生及び劣等生と其生れし時の父の年齢との關係	叢談	18-10	1915-5	調査
79	越智 末一郎	新入学児童の知能測定に就て	雑報	18-11	1915-6	他
80	池田 隆徳	白痴の感情	彙報	19-1	1915-8	医学
81	富士川 游	児童の養護	叢談	19-1~9	1915-8~ 1916-4	医学
82		日本心育園	雑報	19-6	1916-1	施設
83		大阪桃花塾	雑報	19-6	1916-1	施設
84	樋口 長市	腺増殖と智能の鈍弱に関する疑問	雑報	19-8	1916-3	教育
85		日本心育園修業式	雑報	19-9	1916-4	施設
86	三田谷 啓	精神薄弱児教育に就て	雑報	19-9	1916-4	医学
87	関 寛之	児童の触覚と能力との關係	彙報	19-10	1916-5	心理
88	三宅 鑛一	特殊教育に就て	評論	19-12	1916-7	医学
89	三輪田 元道	優等児と劣等児	叢談	19-12	1916-7	他
90	川田 貞治郎	米国に於ける精神薄弱児の研究	叢談	20-2	1916-9	施設
91	齊藤 生	苛酷なる低能児教育法	評論	20-6	1917-1	他
92	川田 貞治郎	精神薄弱児の注意に就て	叢談	20-7	1917-2	施設
93	唐沢 光徳	哺乳児期に於ける小児の脳性疾患と白痴及び低能児との關係	彙報	20-7	1917-2	医学
94	呉 秀三	白痴に就て	叢談	20-11	1917-6	医学

No	著者名	題名	記事 類型	巻号	発行年月	分類
95	柴崎 寿松	育児院に於ける異常児教育に就て	雑報	20-11	1917-6	学校
96	藤井 万喜太	教育院に在る白痴児童の二三に就て	雑報	20-11	1917-6	他
97	柴崎 寿松	育児院に於ける異常児学級(1)(2)	講演	21-4.6	1917-11~ 1918-1	学校
98	川田 貞治郎	精神薄弱児に就きての智力検査	彙報	21-4	1917-11	施設
99	呉 秀三	精神病学上より見たる少年犯罪者(1)(2)	講演	21-6 21-12	1918-1 1918-8	医学
100	高島 平三郎	児童の変態心理に就きて	叢談	21-6	1918-1	心理
101	大橋 矢・ 加藤 大一郎	低能児童と先天性梅毒との関係	叢談	21-11	1918-6	医学
102	桐原 生	天才児と低能児(岩崎重三著)	紹介	23-12	1920-7	心理
103		東京府の補助学校設立	雑録	24-3	1920-11	他
104	青木 誠四郎	教授衛生上より見たる精神薄弱児童及成績不良児童	彙報	25-3	1921-11	心理
105	栗原 信一	低能児には女が多いか男が多いか	彙報	25-3	1921-11	心理
106		低能児の保護教育	雑報	25-3	1921-11	他
107	三田谷 啓	特殊児童の学校村の施設に就きて	彙報	25-4	1921-12	医学
108	樋口 長市	異常児の幼稚園	彙報	25-4	1921-12	教育
109	栗原 信一	学校と低能児	彙報	25-5	1922-1	心理
110		低能児鑑別法	雑報	25-5	1922-1	行政
111	樋口 長市	欧米の特殊教育(1)~(7)	論説	25-6~ 26-1	1922-2~ 1922-9	教育
112	三田谷 啓	児童保護の精神方面	彙報	25-6	1922-2	医学
113	岩田 義玄	児童の学力を調査して低能児特別教授の必要を感じ	彙報	25-8	1922-4	医学
114		低能児教育講習会	雑報	25-10	1922-6	行政
115		低能児教育講習	雑報	25-11	1922-7	行政
116	セガン 著・ 吉田圭抄 訳	白痴教育の道徳的方面について(上・下)	叢談	26-1 26-2	1922-9 1922-10	学校
117	三田谷 啓	特殊教育機関を盛に興せ	評論	26-2	1922-10	医学
118		劣等児教育	雑報	26-2	1922-10	他
119	富士川 游	異常児童調査(1)~(10)	論説	26-2 ~12	1922-10~ 1923-8	医学
120	青木 誠四郎	心理学(知能と学習)	摘録	26-4	1922-12	心理
121		お茶の水幼稚園を盲啞児・低能児のために開放	雑報	26-4	1922-12	他
122	川田 貞治郎	現代社会と低能児教育問題(1~3)	叢談	26-6.7 26-9	1923-2.3 1923-5	施設
123	脇田 良吉	適才教育の徹底	叢談	26-6	1923-2	施設
124		成績不良児教授状況の調査照会	雑報	26-7	1923-3	衛生
125		智能尺度の草案	雑報	26-7	1923-3	他
126	島村 保穂	所謂低能児学級の経営に就いて	雑報	26-12	1923-8	学校
127	江上 秀雄	精神異常児童(1~5)	叢談	27-1~3 27-7.8	1923-9 1923-11.12 1924-4.5	他
128		愛知県の特殊児童保護	雑報	27-3	1923-12	他
129	小河 滋次郎	低能児の教護	摘録	27-7	1924-4	社会
130	金子 準二	精神異常児に就いて(雑感)	叢談	27-8	1924-5	医学
131	青木 誠四郎	身体的障碍の精神に及ぼす影響	摘録	28-3	1924-12	心理
132	三田谷 啓	教育治療院	摘録	28-5	1925-2	医学
133	樋口 長市	特別学級の実際	摘録	28-11	1925-8	教育
134	杉田 直樹	異常児童発生の精神病学的考察	摘録	29-3	1925-12	医学
135	島村 保穂	大阪市児童によりて標準化したる智能尺度		29-6	1926-3	学校
136		低能児の系統原因調査		30-5	1926-8	調査
137	本多 英二・ 今川 誠一	精神薄弱児童の身体的考察	摘録	30-6	1926-9	衛生
138	渡辺 寛	補助学級児童の身体検査について	会報	30-7	1926-10	医学
139	今井 良平	身体智能薄弱児童検査成績	摘録	30-8	1926-11	医学
140		特殊児童の訓育方針	雑報	30-9	1926-12	行政

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

No.	著者名	題名	記事 種類	巻号	発行年月	分類
141		低能児の教育調査	雑報	30-11	1927-2	調査
142	渡辺 寛	補助学級児童の健康状態に就て(1)(2)	論説	31-1.2	1927-4.5	医学
143	村松 常雄	東京市補助学級児童の智能に就て	論説	31-4	1927-7	医学
144		低能児教育の振興策を立案	雑報	33-12	1930-3	行政
145		血族結婚の結果部落民の一割は白痴	雑報	34-3	1930-6	他
146	立花 改進	補助学級児童の養護に就て	雑報	35-2	1931-5	学校
147		補助学級児童の身体的方面の考察	雑録	35-3	1931-6	衛生
148		精神薄弱児童養護施設に関する方案	雑報	35-3	1931-6	行政
149		低能児の教育	雑報	35-10	1932-1	他
150		文部省主催精神薄弱児童養護施設講習会	雑報	35-12	1932-3	行政
151	川田 貞治郎	臨床的白痴児の新分類の研究	論説	37-1	1933-11	施設
152	長沼 幸一	特殊教育の要諦	摘録	37-1	1933-11	学校
153	林 蘇東	東京府管内就学免除及び猶予児童	論説	37-3	1934-3	施設
154	林 蘇東	精神薄弱児・普通児のピアジェ法左右弁別力比較	論説	37-4	1934-5	施設
155		精神異常児童調査委員会要項	雑報	37-5	1934-6	他
156		精神薄弱児愛護協会	雑報	37-10	1935-5	他
157	樋口 栄	白痴, 痴愚, 魯鈍の原因, 分類, 症状及び情意方面の通有性	摘録	37-11	1935-7	医学
158	岩崎 佐一	精神薄弱児童の救護徹底策	摘録	38-2	1936-1	施設
159		異常児並に要護児童の早期発見	雑報	38-3	1936-3	社会
160	杉田 直樹	性格異常による犯罪少年の処置に就て	摘録	38-4	1936-5	医学
161		小学校養護施設講習会	雑報	38-4	1936-5	衛生
162	林 蘇東	心理臨床上より観たる予後考察	摘録	38-5	1936-7	施設
163	吉益 脩夫	都市青少年犯罪者の人格調査	摘録	38-7	1936-11	医学
164		「愛護」創刊	雑報	38-7	1936-11	他
165	皇 晃之	低能児教育の根拠と限界	論説	38-8	1937-1	学校
166		日本精神衛生協会総会及び第一回研究会	雑報	38-10	1937-5	他
167	長沼 幸一	精神薄弱児の行動面にみる膠着性	摘録	39-2	1938-1	学校
168	雨宮 保衛	学齡児童に於ける二三神経疾患に就て	摘録	39-3	1938-3	医学
169	林 蘇東	小児の心の育て方・育ち方	論説	39-4	1938-5	施設
170		日本応用心理学会第三回大会	雑報	39-4	1938-5	心理
171		日本精神衛生協会総会及び第二回研究会	雑報	39-4	1938-5	他
172	金子 準二	精神病者の断種問題に就て	論説	39-5	1938-7	医学
173		精神異常児, 身体異常児及び虚弱児の保護対策	雑報	39-5	1938-7	他
174		精神薄弱児保護座談会	雑報	39-8	1939-1	他
175	森川 規矩	栄養改善が精神異常児の発育に及ぼす影響に就て	摘録	39-9	1939-3	医学
176	厚生省社会 局 児童課	児童調査に関する件 (心身異常児の調査)	叢談	39-9	1939-3	調査
177		精神薄弱児童養護展覧会	雑報	39-9	1939-3	他
178		日本心理学会第7回大会	雑報	39-11	1939-7	心理
179		精神薄弱其の他の異常児童に対する特殊教育施設 (の設置を陳情)	雑報	39-12	1939-9	他
180	久保寺 保久	特異児童の芸術的教養	論説	40-4	1940-5	施設
181		知能指数と少年受刑者	叢談	40-4	1940-5	他
182	長沼 幸一	特殊児童と児童研究	摘録	40-5	1940-7	学校
183	喜田 正春	精神薄弱児と学校教育	摘録	40-6	1940-9	学校
184	横山 義顯	精神薄弱児童の取扱に就て	摘録	40-9	1941-3	感化
185	高峰 博	治療教育学的に観たる保護少年の問題	摘録	41-1	1941-11	他
186	川本 宇之介	異常児教育と保護施設の発展を要望す	摘録	41-3	1942-3	学校
187	細野 伝	精神薄弱少年の不良行為及び犯罪	摘録	41-6	1942-9	医学
188	牛島 義友・ 永松 一郎	精神薄弱児に於ける作業効果に就て	摘録	41-7	1942-11	心理
189	田代 浩	精神薄弱者の発達の考察	摘録	42-2	1944-1	医学

〈資料2〉

「児童研究」誌における諸外国の主要な「精神薄弱」概念

高橋 智 作成

No	著者(抄・訳者)名	タイトル・出典	巻号	ページ	年月	文献類型	概念規定
1	ルブレイト	大都会に於ける幼年犯罪者の心理承前) (ミュンヘン幼年裁判所の実例より)	14-2	65-66	1910(M43).8	心理学	遅鈍: 「先天性であつて治療すべからざる精神的欠損がある精神的発育抑制」
2	チーヘン(富士川游抄)	精神病性児童及び精神薄弱児童ノ性欲異常	14-7	212-213	1911(M44).1	医学・病理学	精神薄弱: 「量度的ノ異常ニシテ、追想、観念、概念ノ生成、観念連合、注意等ノ常度ニ達セザルモノ」 「ソノ智力ノ度ニ從ヒテ、白痴、痴愚及ビ魯鈍ノ三種ニ別ツ」 (参照、精神病性体質: 「性質的異常ニシテ、各種ノ精神作用ガ常ニ異常ナルモノ」)
3	エフ・ワクブルグ(T. K. 抄)	先天性語言及び其処置	14-11	335-336	1911(M44).5	医学・病理学	先天性語言: 「如何ノ方法ニヨリテコレヲ教ユルトモ、文字ヲ言語トシテ綴ルコト能ハズ、故ニ読書、書字ノ能力ヲ欠クモノ」
4	カール・バルツ(O. N. 抄)	児童期ニ於ケル精神薄弱ノ認識法 Kindergarten Oktober 1913	17-6	223-224	1913(T2).1	心理学	精神薄弱: 「智識欠損ナルヲ以テ其症候ハ記憶、概念形成、判断能力ノ三方面ニ障碍ヲ現ハス」 (参照、精神病の体質: 「智識ハ完全ニシテ、記憶、概念形成、判断能力モ尋常ニ発育スレドモ感情障碍、病的ノ思考方向、又時トシテハ妄覚アルモノ」)
5	エー・ザイフェルト(竹内薫兵抄)	保護児童ノ精神病的検査 Psychiatrische Untersuchungen über Fürsorgezöglinge. Halle	17-9	334	1914(T3).4	医学・病理学	魯鈍: 「重症ナル先天的低能ニシテ器質的ノ病的欠損アルコト確實ナルモノ」、痴愚: 「思考器官ニ異常アルカ又ハ種々ナル種類ノ合併症アリテ智的低格ト認ムベキモノ」
6	ワルシュ(桐原葆見抄)	精神薄弱者ノ夢 Medical Record. March. 1920. Vol.97.No10	24-5	95-97	1920(T9).12	心理学	精神薄弱者: 「生来又は、極く幼年に、脳の発育の一部若しくは全部阻止せられた者であつて、随つて成長後自然落伍者となつたものヲ謂」 「その智能の大小によりて、これを大きく白痴、痴愚、呂鈍の三に分ける」、白痴: 「正常児童の六ヶ月乃至二歳位の智能を有するもの」、痴愚: 「三歳乃至七歳の児童の智能に相当する智能を持つたもの」、呂鈍: 「平均八歳乃至十二歳の児童の智能に相当」
7	リューラー(S. K. 抄)	異常児童及び精神病児童の取扱	24-11	307-309	1921(T10).7	医学・病理学	痴呆: 「極めて簡単な環境に対しても、反応又は適応するの能力を賦与せられないで生れた者」、痴愚: 「複雑な社会では適応して行くことが出来ないが、簡単な社会に移すと有用の材ともなり得る」、精神低格: 「生来、適応して行く能力をば充分に賦与せられて居ても、その環境が悪かつたために正常の発育をなし得ない者」
8	シビル・バート(桐原葆見抄)	不良性と精神欠陥 [一] The British Journal of Medical Psychology Vol. III, Part III. 1923	27-4	134-137	1924(T13).1	医学・病理学	精神欠陥: 「単に知力の欠陥のみならず、氣質及び性格上の欠陥をも含むもの」 知力欠陥・低能児: 「知力指数七〇以下のもの(中略)普通の学校に於いて、一般の教育を受けしめることは必ず出来ないもの」 氣質的欠陥: 「本能或は情緒と、知力並に知的統制より生ずる道徳的制御力との間の平衡を失つた場合に、『不安定』の状態となる。而して生来性の因子による情緒的の『不安定』の甚しいもの」
9	マリー・エル・ジャックソン(K. 生抄)	学年別ナキ個人教授 Journal of Education Nov.20, 1924	28-7	267-268	1925(T14).4	教育	精神不完全児童: 「智力指数七十五以下ノモノ」 「智力指数六十以上の児童ハ、幼少ノ内ニ特殊学級ニ收容スルナラバ、其智力ノ程度ニ適シタ仕事ヲ行ハシメルニ訓練シ易ク、従ツテ彼等ハ有用ナ自活スル市民トナル。五十以下ノ智力指数ヲ有スル児童ハ矯正シ難ク、看視の注意ノ下に置キ、此ノ同質児童ヨリナル集団ニ、多少ノ競争心ヲ起サシメル」
10	アルベルティニー(T. M. 抄)	精神異常児童保護ニ対スル提案 Infanzia anorm. Jg.16. Nr.6. S.125	29-2	58-59	1925(T14).11	教育	真性精神異常者(精神薄弱者、異常性格、精神病者): 「其ノ原因ガ中枢神経系ノ傷害ニアル者(中略)特殊学校或ハ特殊療養教育所ニ於ケル教育ヲ必要」 仮性精神異常者: 「不適当ナル家庭的社会的影響ニ基因(中略)尋常小学校ニ於ケル特設級ニ入ルルヲ以テ最上トス」
11	ペーテルズ(桐原葆見抄)	異常児童ノ心理学的類型 Zeits. f. päd. Psy., exp. Pädag. u. jugendl. Forsch. Jg.28. Nr.1. 1927.	31-12	323	1928(S3).3	心理学	異常児童の三型 「一、不定型。コレハ注意ニ欠陥アリ、思考及び行為ガ無目的ニシテ、知識ニ欠陥多ク、想像ハ支離滅裂デアル。瞬間的作業ハ比較的ヨクスルケレドモ、持続的作業ハデキナイ。情緒ノ表出ニ於テハ、抑制スルコトガデキナイ。根本的ニ分離セル人間デアツテ、周囲トノ関係モ稀薄ニシテ、ソレニ左右セラレルコト少ク、随ツテ教育ノ効果ハ少イ。コレニ属スルモノハ種々ノ智能遲退者デアル。」 「二、受動型。コレハビネーノ智能遲退型ニ相当スル。言語調節ガ充分ニデキズ、言語ノ理解モヨクナイ。ソノ内的生活ハ簡單ニシテ貧弱デアル。殊ニ衝動力ノ欠如ガ著シイ、随ツテ常ニ纏纏、指導ガ必要デアル。教育ハ可能デアル。ソレハソノ智能薄弱ノ程度ニ依ジテ訓練並ニ習熟セシメネバナラス。而シテソノ智能ノ程度相応ニハ役ニ立ツ。」 「三、衝動型。情緒及び衝動ヲ制御スル能力ニ欠ケテイル、而シテソノ衝動ノ発スルママニ行動スル、ソノ行動ハ概ネ反社会的デアル。而シテソレハ週期的ニ至ルモノガアリ、又持続シテイルモノガアル。」

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

No.	著者(抄・訳者)名	タイトル・出典	巻号	ページ	年月	文献類型	概念規定
12	ジー・エー・アウデン ※(加藤文字訳) ※英国バーミンハム市学校医官	精神薄弱の範囲	32-10	250-251	1929(S4).1	児童研究	<p>「精神欠陥(白痴から如能発達遅延に至るまで)」のとらえ方:「所与の原因から、その結果が生ずるといふ一元的の條件」でとらえるのではなく、「原因的には相異してゐるが、しかし、同じく精神過程の直接表象である精神現象や行動などが、同一なる一般的型式に依つて表明せられたる数個の條件を、まとめつつあるものではないか」ととらえる。</p> <p>「精神欠陥」の2類型</p> <p>1.「進化型」:(1)進化的過程が阻止せられ、個人並に常に其処から生ずるところの素質も共に、現代の教育的社会的組織が要求する知能発達の程度に達しないもの、(2)外観に於いては正常者と何等異なる所がない、(3)一般知能の衰退よりもむしろ特殊の教育的能力即ち算術とか読書のやうなものに対する理解力に欠陥がある。</p> <p>2.「退化型」:(1)或る少数の間欠的因子が素質を破壊しやうとする傾向をもつて顯はれて来るもの(内分泌腺の活動が平衡を失し、或は欠損するといふ如き因子—「phthisogenic」)、(2)屢々変質徴候を現はす。</p>
13	ジュウェル(沼田米彦抄)	境界線上ノ精神薄弱児ノ精神发育 Jewell, E.J. Research in Progress. Mental Growth of Borderline Feebleminded. Tr. School Bull., Vol.26, 1929. pp.38-42	33-8	212	1929(S4).11	心理学	<p>「境界線上ノ精神薄弱児」の「三種ノ发育型」</p> <p>1.「将来的精神薄弱」:「幼時ニ於テハ智能検査デ薄弱タルコトヲ見出セナイ、ソレガ成長スルニ從テ漸次遲退ノ度ヲ加ヘテ、智力指数ハ漸下シ、発達ノ速度ハ到底普通児ト比較ニナラナイ、学業ニ於テモ亦遲退シテ行ク」</p> <p>2.「真ノ境界線上ノ児童トモ云フベキ型」</p> <p>3.「发育停滞型」:「従来認メラレナカッタ型デアルガ、コレハ平均群ノ外ニ居ルモノニ見ル所デアツテ、境界線ノ水準ニ達シタト思ハレル以後ニモ長ク、極メテ緩慢デアハルガ確實ナ発達ヲナスモノデアツテ、ビネー検査法ニ精神薄弱又ハ境界線ト名クル所ヨリ以上ニ発達スルモノ」</p>
14	アイゼンシュタイン(桐原傑見抄)	先天性精神薄弱ノ型 Eisenstein, I. Psycholog. Untersuchung. u.d. verschiedenen Formen des angeborenen schwachsinnigen Zeitsch f. Kinderforsch Bd. 35. 1929. S. 563-589	33-8	213-214	1929(S4).11	心理学	<p>一、</p> <p>a. 痴鈍型 無興味、無関心ニシテ、心的活動ニ対スル自発的衝動ナシ。</p> <p>b. 活動型 活発ナ氣質ヲ有シ、智能低ケレドモ活動欲強ナリ。</p> <p>二、情緒性障害型</p> <p>思考作用が情緒的ニ抑圧セラレ、又障碍セラレタモノデ、智能ノ低イ原因ハ主トシテ情緒ノ異常ナ興奮性ニ基ク。</p> <p>三、健忘症障害型</p> <p>記録ノ悪イコトガ著シク、随ツテ学習及経験ヲ蒐集シテ総括スルコトガデキナイ。</p> <p>四、精神作動障碍型</p> <p>注意緊張ノ作動ノ薄弱ヨリシテ、思考甚ダ緩慢ニシテ難澁、心的作業ニ於ケル疲労性大ニシテ、注意集中能ナク、ソレヲ持続スルコト困難デアル。或ル者ハ決定能欠如セルタメ精神分裂ヲアラワシ、或ル場合ニハ一ノ心的態度ニ固執シテ自動運動的ニナル。又屢々被暗示性ノ異常ニ強イモノガアル。</p> <p>五、思考薄弱型</p> <p>a. 総合、分析不能型</p> <p>關係ノ総合的理會及ビ全体ヲ分析スルコトガ特ニ不能デアアル。</p> <p>b. 構成、綜合不能型</p> <p>比較的高イ一般的能力ヲ有スルニモ拘ラズ、構成或ハ結合ヲ要スル作業ニ特ニ不能デアルコレ注意集中ノ能ニ欠陥ガアルモノニテ、ソノ結果トシテ系統的作業及ビ一定ノ計画ニヨリテ意味アル形態ヲ構成スルコトガデキナイ、ソノ作動ハ無効果ニシテ、目的意識ニ欠ケテイル。</p> <p>c. 概念構成不能型</p> <p>コレニ二型アリ、一ハ抽象能ニ欠ケ、具体的感覺的ナコトノミヲ解スルモノ、ソノ二ハ概念ガ明確ニデキナイモノ、事物ノ内容ヲ明瞭ニ見ルコトガデキナイ。</p> <p>六、異常主観型</p> <p>實在感ナク、事物或ハ客觀的法則ニ対スル感性ヲ失ヒ、幻想的想像ニ傾キ、事物ニ対スル態度ハ主観的デ我儘デアアル。狭義ノ智能水準ハ低イ。</p> <p>七、特殊智能型</p> <p>智能ノ一般的水準ガ低イノデアアルガ、更ニ或ル特殊ナ方面ニ特別能力又ハ欠陥ヲ有スルモノデアツテ、</p> <p>(a) 特ニ視學的知覚ニ欠陥ガアツテ、物ノ形及ビ空間的關係ヲ把エルコトガデキナイ。</p> <p>(b) (a)ト反対ニ、特殊ノ視覚的能力アルモノ。</p> <p>(c) 器械的記憶能力ノ大ナルモノ、時ニ普通以上ニ良イモノガアル。</p> <p>八、智能語能不調和型</p> <p>コレニ二型アリ、ソノ一ハ、智能ハ比較的良クシテ、ソノ言語能ト調和セザルモノ、ソノ二ハ、理的概念的不能力ト、見カケノ流暢ナル言語ト調和セザルモノ。</p>
15	ウィンデンスコフ(文学士ヤ. タ. 抄)	智能検査 Ugeskr. Lalg. 1928 II, 1180-1183.	34-1	19-21	1930(S5).4	心理学	<p>イデオーション 白痴: 智能商 0 乃至三〇、痴愚: 三〇乃至五十五、愚鈍: 五十五乃至七十五</p>

「教育科学研究」第6号 1988年5月

No.	著者(抄・訳者)名	タイトル・出典	巻号	ページ	年月	文献類型	概念規定
16	フェドロフ (文学士T. F抄)	知能遅滞の諸定型 Trudy Iust.Izuc.MozgaBechtereV, 1936,V. 263-312	38-12	441-442	1937(S12).9	心理学	<p>「智的欠陥ある児童は魯鈍的 (debil) 痴愚的 (imbezill) 白痴的 (idiotisch) なる三種類に分類されるのが普通であるが、(中略) かかる分類は、治療教育上の目的から見て不十分である。治療教育を行はむがためには、欠陥の質的構造の特徴を仔細に示すことが肝要である」 「(-)記憶 (-)注意 (-)理解 (-)類別作用 (-)結合・構成作用 (-)推論」の各方面の検査をもとに「智的欠陥ある児童」を次の5群に分類した。</p> <p>「(-)智能が全面的に立後れてはいるが、それ以外には異常のないもの。</p> <p>(-)智能の遅滞が甚しき有機的障病に根差せるもの。この種の児童に於いては、検査の成績に非常な斑がある。氏は、この種の児童を、さらに三つに区分している。そのうち、治療教育上特に顧慮せらるべきは、感情の激し易いものと鈍感なものである。</p> <p>(-)神経性児童。氏は、この種の児童を、極く疲勞し易いもの、自身が少しもなく極めて臆病なもの、落着が全然なく如何なる物事にも充分注意することの出来ないもの等に區別している。</p> <p>(-)實際は智的欠陥がないにも拘らず、眼や耳などが悪いため智的欠陥があるやうに見える児童。</p> <p>(-)適当の教育を受けなかったため智能の発達を妨げられた児童。」</p>

〈資料3〉

『児童研究』誌における「精神薄弱」関係文献目録（外国の部）

(分類略号)

*教育(学)→教育

*児童研究→児童

*心理学→心理

*医学・病理学→医学

*調査・統計他→調査

*社会事業→社会

高橋 智 作成

No.	著者, 抄録・抄訳者名	題 名	記 事 型 類	巻 号	発 行 年 月	分 類
1		「ぐろっすまん」氏児童研究	紹 介	1-1	1898-11	児童
2		伯林児童心理学会	彙 報	3-3	1900-9	医学
3		ショルツ氏著「児童性格の欠陥」	紹 介	3-6	1900-12	心理
4		ストルンベル氏著教育病理学	紹 介	3-7	1901-1	教育
5		ブルクハルド氏著「児童の欠陥」	紹 介	3-7	1901-1	教育
6		児童学第一巻第一号第二号第三号	紹 介	3-9	1901-3	児童
7	榊保三郎抄	小児ト「アルコール」問題	紹 介	6-1	1903-1	医学
8	榊保三郎抄	精神発達遅滞の小児に於ける言語の発達及其治療法「アルベルト, リーブマン」	紹 介	6-1	1903-1	心理
9	松本孝次郎抄	スピットネル氏著教育病理学	紹 介	6-4	1903-4	教育
10	下田次郎抄訳	マグドナルド氏児童の研究(承前)		7-2	1904-2	児童
11	ハヴェロック・エリス	犯罪者の心理		8-8	1905-8	心理
12	ルイス・エム・ターマン	伶俐と愚鈍	抄 訳	10-8	1907-8	児童
13	ビナー・シモン	精神低能の測知法	紹 介	10-11	1907-11	心理
14	ケー・ピアソン (会津常治訳)	賢愚と身体的標徴との関係	抄 訳	10-12	1907-12	児童
15	エル・イムホーフエル	低能者の音楽聴取	摘 録	11-1	1908-1	教育
16	ワイガント (富士川游抄)	精神異常の児童	摘 録	11-1	1908-1	教育
17	ベヒホルド (三宅鉦一抄)	低能児の学校及び其他の保育事業	摘 録	11-1	1908-1	教育
18	ラクエール (富士川游抄)	学校に於ける精神薄弱児童と其教育	摘 録	11-1	1908-1	教育
19	ドクトルヘルフルト (池田隆徳抄)	低能児の齒列	摘 録	11-2	1908-2	医学
20	ユリウス・フックス (池田隆徳抄)	低能児言語教育に関する意見	摘 録	11-2	1908-2	教育
21	ニュッシ(池田隆徳抄)	低能児の算術教育	摘 録	11-2	1908-2	教育
22	チャー・クナイド (池田隆徳抄)	白痴と痴愚の統計及原因	摘 録	11-3	1908-3	調査
23	ルイス・アール (池田隆徳抄)	低能者と兵役	摘 録	11-4	1908-4	調査
24	シュレージンゲル (富士川游抄)	精神薄弱の児童	摘 録	11-5	1908-5	医学
25	マックミラン (倉橋惣三抄)	児童の分類	摘 録	11-6	1908-6	児童
26	ショルツ(三田谷啓抄)	マンハイム式小学校	摘 録	12-1	1908-7	教育
27	ウーフェンハイメル (富士川游抄)	成績不良の児童	摘 録	12-1	1908-7	教育
28	バーンハム	腺状殖生	摘 録	12-1	1908-7	医学
29	ライゲン・シュレージンゲル(富士川游抄)	精神薄弱児童の原因	摘 録	12-2	1908-8	医学
30	ゲー・ヒュットネル (富士川游抄)	高等学校の特別学級	摘 録	12-2	1908-8	教育

No.	著者、抄録・抄訳者名	題 名	記 事 類 型	巻 号	発 行 年 月	分 類
31	ホイブネル (笠原道夫抄)	白痴及其類似状態ノ統計的観察	摘 録	12-3	1908-9	医学
32	チーミッヒ (笠原道夫抄)	嬰兒期ニ於テ痲痺セン兒童ノ精神発達	摘 録	12-3	1908-9	医学
33	シュレージンゲル (笠原道夫抄)	低格学齡兒ノ言語障碍		12-3	1908-9	医学
34	ドクトル・フランツ・ コブラーク	精神薄弱及ビ重聴	摘 録	12-3	1908-9	医学
35	沢木伊重	伯林小学校ニ於ケル低能兒ノ検査成績	原 著	12-4	1908-10	教育
36	エス・バルト (富士川游抄)	精神薄弱兒童ノ原因	摘 録	12-4	1908-10	医学
37	富士川游	トリュベール教育所の概況	雑 報	12-4	1908-10	教育
38	ヘルレル(安井洋抄)	兒童期痴呆症ニ就テ	摘 録	12-5	1908-11	医学
39	ライヒハルト (吉田圭抄)	白痴及常人ニ於ケル精神欠陥	摘 録	12-5	1908-11	医学
40	バイエンタール (富士川游抄)	酒毒ノ痴愚ニ及ボス関係	摘 録	12-7	1909-1	医学
41	オスワード・ベルクハ ン(笠原道夫抄)	低能兒ト睾丸陰在及ビ睾丸下降顯象遅延	摘 録	12-7	1909-1	医学
42	ハ・イ・フォーグト	白痴論ノ現状	摘 録	12-8	1909-2	医学
43	バイエンタール (富士川游抄)	精神薄弱ノ原因	摘 録	12-9	1909-3	医学
44	ウァイガント (藤井秀旭抄)	「モンゴロリスムス」ノ学説補遺	摘 録	12-9	1909-3	医学
45	オイゲン・シュレージ ンゲル(富士川游抄)	低能兒童ノ医学的所見	摘 録	12-10	1909-4	医学
46	レオポルド・ラッセル (藤井秀旭抄)	学校及ビ病院ニ於ケル精神薄弱者(輕痴, 痴愚)ノ医学 的及教育的処置	摘 録	12-11	1909-5	医学
47		匈牙利ニ於ける盲啞低能教育の状況	雑 報	12-12	1909-6	教育
48	富士川游	トリュベール氏教育院	叢 談	13-1.3	1909-7.9	教育
49		デンマーク国の低能兒保護概況	雑 報	13-1	1909-7	社会
50		埃国の低能兒救護院	雑 報	13-1	1909-7	社会
51		那威国の低能兒保護事業	雑 報	13-1	1909-7	社会
52	ヨハンベルケス (吉田圭抄)	低劣兒童ノ感覺世界ト意志世界	摘 録	13-2	1909-8	心理
53	ベンナッゾー (千日亮抄)	低劣兒童ノ塑像術ト写眞技能	摘 録	13-2	1909-8	児童
54	ナドレッツニー	低劣兒童ノ言語障碍ニ就キテ		13-4	1909-10	医学
55	バイエルタール (笠原道夫抄)	学齡期ニ於ケル低能兒ノ原因及其予防ニ就テ	摘 録	13-5	1909-11	医学
56	マリー・ベル・グリー ン(倉橋惣三抄)	低能兒教育実例	摘 録	13-6	1909-12	教育
57	マルチン・チーミヒ (富士川游抄)	補助学校生徒ノ身体	摘 録	13-7	1910-1	医学
58	フェールステンハイム (千日亮抄)	精神異常兒童ノ社会的保護	摘 録	13-7	1910-1	社会
59	フランツ・ワイグル	独逸ニ於ケル低格兒童ノ教育	摘 録	13-7	1910-1	教育
60	ロイブッシュェル	精神薄弱ノ原因	摘 録	13-8	1910-2	医学
61	ハスコヴェツク	精神薄弱ノ予防	摘 録	13-8	1910-2	医学
62	バイエルタール (賀川哲夫抄)	学齡兒童低格ノ原因及ビ予防法	摘 録	13-9	1910-3	医学
63	パウル・ミカエリス	精神病者ガ産メル兒童	摘 録	13-9	1910-3	医学
64	ジョーヂ・イー・ダウ ソン(高島平三郎抄)	痴鈍兒童ノ欠陥ノ一特質	摘 録	13-10	1910-4	児童

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

No	著者、抄録・抄訳者名	題 名	記 事 類 型	巻 号	発 行 年 月	分 類
65	アウグスト・ウィンメル	精神薄弱児童ノ連想ノ検査ニ就キテ	摘 録	13-11	1910-5	心理
66	ポトベシュニク	児童低格ノ本態及ビ原因ニ就キテ	摘 録	13-11	1910-5	医学
67	ドクトル・エルマ・リトオク	低格児童ノ色覚	摘 録	13-11	1910-5	心理
68	コブリアン (賀川哲夫抄)	精神薄弱者ノ手工科トシテノ金属細工	摘 録	13-11	1910-5	教育
69	ドクトル・ヘルマン・ウルブリヒ	精神薄弱児童ニ対スル眼科学上ノ研究	摘 録	14-1	1910-7	医学
70	アー・レエター	尋常児童及ビ低格児童ノ耳鼻科学上ノ研究	摘 録	14-1	1910-7	医学
71	ルブレヒト	大都会に於ける幼年犯罪者の心理(ミュンヘン幼年裁判所の実例より)	叢 談	14-1・2	1910-7・8	心理
72	ドクトル・バイエルター	学齡児童低格発生ノ原因及ビ其予防ニ就キテ	叢 談	14-1・2	1910-7・8	医学
73		匈牙利国立教育治療院	雑 録	14-2	1910-8	教育
74		英国に於ける精神薄弱者の増加	雑 録	14-2	1910-8	調査
75	チーヘン(千日亮抄)	児童期ニ於ケル精神薄弱ノ識別	摘 録	14-3	1910-9	医学
76	ドクトル・ゲー・フラタウ (千日亮抄)	学校生徒ノ精神的確病	摘 録	14-3	1910-9	医学
77	トラモンチー (千日亮抄)	脳神経衰弱性児童ノ犯罪的傾向	摘 録	14-4	1910-10	調査
78	レツプマン (富士川游抄)	詐病ト精神低格	摘 録	14-4	1910-10	医学
79	レイ	正常及異常児童ノ教育ニ於ケル心理学ノ役目	摘 録	14-5	1910-11	心理
80	レツヒネル	正常及病的感情ニ就テ	摘 録	14-5	1910-11	医学
81	ルービノヴィッチ (莊司秋次郎抄)	不良児童ノ教育的精神病学ニ就テノ報告	摘 録	14-5	1910-11	医学
82	ウェーベル (富士川游抄)	生来ノ犯罪者	摘 録	14-6	1910-12	医学
83	ゲー・アントン	児童ノ悖徳性	摘 録	14-6	1910-12	医学
84	チーヘン(富士川游抄)	精神病性児童及ビ精神薄弱児童ノ性欲異常	摘 録	14-7	1911-1	医学
85	ザイフェルト	低能者及ビ精神病性素質者ニ対スル教育家及ビ精神病学者ノ責任	摘 録	14-8	1911-2	教育
86	アー・レップマン	懲矯院ノ精神薄弱者	摘 録	14-9	1911-3	社会
87	ゼムネリール (富士川游抄)	異常児童ノ教育	摘 録	14-9	1911-3	教育
88	ピーアス, ランキン, オルモンド共述	蒙古種性痴愚ニ就テ	摘 録	14-10	1911-4	医学
89	ワイガント (賀川哲夫抄)	精神薄弱	摘 録	14-10	1911-4	児童
90	チーミツヒ	児童殊ニ精神薄弱児ノ叡智検査法	摘 録	14-11	1911-5	心理
91	スピッチー (賀川哲夫抄)	精神薄弱児ノ身体的教育	摘 録	14-11	1911-5	教育
92	エフ・ワルブルグ	先天性語盲及ビ其処置	摘 録	14-11	1911-5	医学
93	シュレーゲル	精神薄弱児ノ絵画教育	摘 録	14-11	1911-5	教育
94	カー・メルテルスマン	補助学校ニ於ケル手工教育	摘 録	14-11	1911-5	教育
95	フィリップ, ビボンセル 共述	異常者ノ教育	摘 録	14-12	1911-6	心理
96	エル・ブライス (富士川游抄)	両親ノ飲酒ト子孫ノ痴愚	摘 録	15-2	1911-8	医学
97	シエーフエル	長子ト低能	摘 録	15-3	1911-10	児童
98	ウインテルマン	補助学校卒業生ノ保護	摘 録	15-4	1911-11	社会
99	エフ・アー・シュミット (富士川游抄)	精神低格ノ原因	摘 録	15-5	1911-12	医学
100	ワイガント	脳ノ変化ト精神ノ異常	摘 録	15-5	1911-12	医学
101		大都市に於ける児童の身体	雑 録	15-5	1911-12	調査

No	著者、抄録・抄訳者名	題 名	記 事 類 型	巻 号	発 行 年 月	分 類
102		実験法(1) ド・サンクチス氏精神不足程度	叢 談	15-6	1912-1	心理
103	ボルハーゲン	補助学校生徒ノ疾病	摘 録	15-6	1912-1	医学
104	デーリツチュ (富士川游抄)	個性ノ教育	摘 録	15-7	1912-2	心理
105	ベツケル	補助学校ノ教科書	摘 録	15-7	1912-2	教育
106	オスカー・フォン・ホ ヴォルカ(富士川游抄)	精神薄弱児童ニ斜視ノ多キコト	摘 録	15-7	1912-2	医学
107	ズーテル(富士川游抄)	精神薄弱児童ノ作業教育	摘 録	15-8	1912-3	教育
108	カー・ルツプレヒト	小児ノ痴鈍及ビ青年ノ刑罰	摘 録	15-10	1912-5	社会
109	ルツプレヒト	夜尿症及ビ其療法	叢 談	15-11	1912-6	医学
110	ゴツダート, ヘンリー 共述	精神薄弱者	摘 録	15-12	1912-7	社会
111	フィツプル (岩波重雄抄)	ビネー, ジモン智力検査法ト素人	摘 録	16-2	1912-9	心理
112	ドクトル・ウエー・ム ルトフェルド	学童ノ精神的欠陥ヲ確定スル試験法	叢 談	16-3	1912-10	心理
113	メルドラ	「アルコール」濫用ノ児童ニ及ボス関係	摘 録	16-4	1912-11	医学
114	シュニツチエル, フー ベルト共述	精神薄弱ノ社会的意義	摘 録	16-4	1912-11	社会
115	チーグレル	精神薄弱者ノ心的作業ノ向上	摘 録	16-4	1912-11	心理
116	ベツケル	補助学校ニ於ケル実物教育及ビ郷土教育	摘 録	16-7	1913-3	教育
117	レーム	精神病(痴愚)児童ニ於ケル植物性食餌ノ栄養試験	摘 録	16-9	1913-4	医学
118		児童ノ「モンゴリヤ」変性	摘 録	16-9	1913-4	医学
119	パウル・フュリー	精神薄弱児童ノ記憶	摘 録	16-10	1913-5	心理
120	ゴツダルト, ヘンリー 共述	亜米利加教育所ニ於ケル精神薄弱児童ノ身長及ビ体重	摘 録	16-10	1913-5	児童
121	ドクトル・クレーフィ ツシュ	補助学校医ノ行為及ビ其教育問題	摘 録	16-12	1913-7	調査
122	ミッデルドルフ (竹内薫兵抄)	学校時期ノ間及ビ其後ニ於ケル補助学校児童ノ社会的保 護	摘 録	17-1	1913-8	教育
123	ドクトル・クレーフィ ツシュ(竹内薫兵抄)	低能児童ノ状態研究ニ就キテ	摘 録	17-2	1913-9	医学
124	ベー・ホツヘ (竹内薫兵抄)	低能児救済	摘 録	17-4	1913-11	教育
125	デリツチ	補助学校卒業児童ノ社会的救済	摘 録	17-4	1913-11	教育
126	レーム(森田正馬抄)	白痴及ビ癩癩児童ニ菜食ヲ以テセル栄養実験	摘 録	17-4	1913-11	医学
127	グネルリツヒ (竹内薫兵抄)	低能児童ノ休暇集団ト休養所	摘 録	17-4	1913-11	教育
128	エーゲンベルゲル	補助学校ノ設備ニ就テ	摘 録	17-5	1913-12	教育
129	カール・バルツ	児童期ニ於ケル精神薄弱ノ認識法	摘 録	17-6	1914-1	心理
130	サッフイオッチ	伊太利ニ於ケル異常児教育	摘 録	17-6	1914-1	教育
131	ユーゴー・シュミット	補助学校ニ於ケル彩色練習	摘 録	17-6	1914-1	教育
132	ウオルフ	補助学校生徒ノ作文	摘 録	17-7	1914-2	教育
133	デクローリー (莊司秋次郎抄)	異常児童ノ智力検査	摘 録	17-8	1914-3	心理
134	ユーゴー・シュミット	補助学校ニ於ケル図画ノ刷毛ヲ以テセル練習	摘 録	17-8	1914-3	教育
135	フォン・バルデレーベ ン(富士川游抄)	左利ハ精神低格ノ徴ナルカ	摘 録	17-8	1914-3	医学
136	エー・サイフェルト (竹内薫兵抄)	保護児童ノ精神病的検査	摘 録	17-9	1914-4	医学
137	レーム	補助学校ノ前級ニ宗教教育ヲ施コスノ可否	摘 録	17-9	1914-4	教育
138		伯林なる低能児補習義務学校	摘 録	17-9	1914-4	教育
139	シンネル	補助学校生徒ノ特性ニ就キテ	摘 録	17-10	1914-5	医学
140	ヒューメル	治療教育学ト保護教育トノ関係	摘 録	17-10	1914-5	教育
141		紐育市の低能児童数	摘 録	17-11	1914-6	調査

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

No	著者, 抄録・抄訳者名	題 名	記 事 類 型	巻 号	発 行 年 月	分 類
142	ドクトル・ボルシャルド (竹内薫兵抄)	精神病児童ノ補助学校ト治療所	摘 録	17-12	1914-7	教育
143	マルタ・マクレアール	異常児童ノ個人的教育法	摘 録	17-12	1914-7	教育
144	エフ・マルホール (竹内薫兵抄)	犯罪者ト精神薄弱トノ関係	摘 録	18-1	1914-8	社会
145	ケルレ (竹内薫兵抄)	精神低格者ノ初等算術教育	摘 録	18-4	1914-11	教育
146	ブリュムケ (竹内薫兵抄)	児童期ニ於ケル痙攣ト其幼年低能ニ関スル意義及ビ関係	摘 録	18-4	1914-11	医学
147		低能児教育講習会	雑 録	18-5	1914-12	教育
148	プロイセン文部省 (三田谷啓抄)	補助学校教師ノ試験	摘 録	18-6	1915-1	教育
149	ドクトル・ドィックホッフ (三田谷啓抄)	伯林補助学校ニ於ケル左手教練ノ成績	摘 録	18-6	1915-1	教育
150	アルノ・フックス (三田谷啓抄)	職業ニ従事セル精神薄弱者ノ社会学的観察	児童学 彙報	18-7	1915-2	社会
151	カムベ (三田谷啓抄)	変質ト「アルコール」問題	児童学 彙報	18-7	1915-2	医学
152	フェッテル (三田谷啓抄)	伝染病ト精神薄弱児	児童学 彙報	18-9	1915-4	医学
153	ピーア, ウァイト共述 (三田谷啓抄)	智力検査	児童学 彙報	19-1	1915-8	心理
154	ビネー及びシモン著	精神欠陥児童	雑 報	20-9	1917-4	児童
155	エフ・ワーナー (上田友太訳)	児童研究 附 児童の教育訓練	翻訳及 紹介	21-10	1918-5	児童
156	ドクトル・ワレエス・ワリン(桐原葆見抄訳)	木栓型盤	紹 介	22-3	1918-10	心理
157	スタンレイ・ホール	児童研究綜覧	紹 介	22-4~5	1918-11~12	児童
158		イギリスに於ける学童の健康状態	雑 報	22-8	1919-3	医学
159	トムソン (桐原抄)	正常児の異常な腕白	叢 談	22-11	1919-6	児童
160	オットー・ヴンデルリッヒ	低能児の質問	抄 録	23-7	1920-2	心理
161	ドクトル・マッチンガー (桐原葆見訳)	精神欠陥の予防	叢 談	23-9 ~24-2	1920-4 ~10	医学
162	ヴィクトール・アーノルド (桐原抄)	児童をその家庭より隔離すべき場合は	抄 録	23-12	1920-7	社会
163	ウォルフソン	児童の半途退学	抄 録	24-1	1920-8	教育
164	ドクトル・ヴィクトル・ハーヴァーマン	智力検査法	学 苑	24-2~5	1920-10~ 1921-1	心理
165	ドクトル・ワルシュ (桐原葆見抄)	精神薄弱者の夢	彙 報	24-5	1920-12	児童
166	スタルク (関寛之抄)	家族性黒内障性白痴	彙 報	24-6	1921-2	医学
167	ドクトル・バーリー及 ポーチウス(関寛之抄)	智力と社会的価値	彙 報	24-8	1921-4	児童
168	ベンネツク	計算上手の白痴	彙 報	24-10	1921-6	教育
169	ドクトル・リュウリー	異常児童及び精神病児童の取扱	学 苑	24-11	1921-7	医学
170	ゴールドン	精神薄弱児童の左利	彙 報	24-11	1921-7	医学
171		ポーランドに於ける児童保護事業講習所	雑 報	24-12	1921-8	社会
172	イー・カイ (富士川游抄)	遺伝ト社会的適応	彙 報	25-1	1921-9	医学
173	ケレー及リッドベター 共述 (桐原葆見抄訳)	遺伝と境遇 [精神異常者と尋常者との比較]	叢 談	25-2~3	1921-10 ~11	医学
174	マツククリデー (富士川游抄)	異常児童ノ医学的観察	彙 報	25-2	1921-10	医学
175	アンダーソン (桐原葆見抄)	不良少女ノ知能検査	彙 報	25-2	1921-10	心理
176	ビゲロウ(桐原葆見抄)	精神薄弱児童ノ産業能力	彙 報	25-4	1921-12	児童

No.	著者、抄録・抄訳者名	題 名	記 事 類 型	巻 号	発 行 年 月	分 類
177	ポッフエンベルゲル	活動写真ト犯罪	彙 報	25-4	1921-21	児童
178	ドクトル・アベルソン (八木邑彦抄)	犯罪児童ノ取扱	彙 報	25-5	1922-1	児童
179	ドクローリー	異常児童ノ教育	彙 報	25-7	1922-3	教育
180	サットン	尋常児童中ノ特殊児童	彙 報	25-9	1922-5	医学
181	ドクトル・ウーレー, ハート共述	退学セル精神薄弱児童	彙 報	25-9	1922-5	社会
182		独逸幼年福祉法案	雑 報	25-10	1922-6	社会
183		薄弱児童ノ保護	雑 報	25-12	1922-8	教育
184	セガン (吉田圭抄)	白痴教育の道徳的方面につきて〔上, 下〕	叢 談	26-1~2	1922-9~10	教育
185	カール・モッセ (富士川游抄)	児童期ニ於ケル暗示	摘 録	26-1	1922-9	心理
186	ドクトル・ラウ (竹内薫兵抄)	春機発動期ノ心理	摘 録	26-2	1922-10	心理
187	ドクトル・ストーン	犯罪者ト軍人トノ知能比較	摘 録	26-2	1922-10	心理
188	ドクトル・リッチモン ド	一授産院(感化院)ニ於ケル精神検査	摘 録	26-2	1922-10	心理
189	ハルムス(三田谷啓抄)	学童落第ノ原因	摘 録	26-2	1922-10	教育
190	ドクトル・グロスマ ン	異常児童	摘 録	26-2	1922-10	児童
191	ヒーリー	犯罪児童ノ科学的研究	摘 録	26-3	1922-11	児童
192	ファンネル・ウイ ルデ ングホーフ	教育成績不良ノ児童	摘 録	26-5	1923-1	医学
193	ヘンリー	不良性児童	摘 録	26-6	1923-2	心理
194	ジョンソン	学校ニ於イテ教育困難ナ児童	摘 録	26-6	1923-2	教育
195	ドクトル・ロウエル	精神年齢ニヨル学級編成	摘 録	26-7	1923-3	教育
196	スタール	不良少女ノ智能検査	摘 録	26-7	1923-3	心理
197	マスデン(山崎保次抄)	知能習得成績	摘 録	26-8	1923-4	教育
198	ドクトル・ハー・ライ ター, ハー・イーレフ ェルド (竹内薫兵抄)	私生児及ビ公生児ノ運命	摘 録	26-8	1923-4	医学
199	ダヴィツドミツ ツェル	新入学児童ノ精神検査	摘 録	26-9	1923-5	心理
200	サー・ジョージ・ ニュー ーマン	特殊学校卒業者ノ就職並ニ学費	摘 録	26-9	1923-5	教育
201	ニューヨーク市特殊学 校視学エリザベス・ フ ァーレル	学校成績不良児ト犯罪者	摘 録	26-9	1923-5	児童
202	シンシナチ市精神保健 委員調査	卒業後ノ低能ノ状況	摘 録	26-10	1923-6	調査
203	イー・オー・ルー イス	低能児ノ記憶	摘 録	26-11	1923-7	心理
204	マーシュ	低能学級ノ国語遊戯	摘 録	26-11	1923-7	教育
205	パウスエル	学校ニ於ケル異常児童ノ取扱	摘 録	27-2	1923-11	教育
206	英国中央精神保護会報 告	低能者ノ不妊法	摘 録	27-2	1923-11	医学
207	シンシナチ市精神保護 会調査委員報告	低能者ノ学院退学後ノ研究	摘 録	27-2	1923-11	社会
208	ドクトル・シリル・ バ ート (桐原葆見抄訳)	不良性と精神欠陥(一)~(二)	叢 談	27-4~5	1924-1~2	医学
209	ハルムス(三田谷啓抄)	小学校生徒落第ノ原因	摘 録	27-4	1924-4	教育
210	コーネル(ニュー ー ヨーク州教育局精神 診断官 補)	特殊学校児童ノ選定	摘 録	27-4	1924-1	教育
211	ロンドン市調査	不良少年ノ智能	摘 録	27-4	1924-1	心理
212	カナヴァン, クラーク 共述	早発性痴呆系ノ児童調査	摘 録	27-4	1924-1	医学
213	ワイグル(富士川游抄)	学校児童検査ノ成績	摘 録	27-5	1924-2	調査

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

No	著者, 抄録・抄訳者名	題 名	記 事	巻 号	発 行 年 月	分類
214		低能ト犯罪ノ統計	摘 録	27-5	1924-2	調査
215	英国ボードオブコント ロール報告	低能令ノ効果	摘 録	27-5	1924-2	社会
216	ドクトル・シュラブス ォール(桐原葆見抄訳)	不良性と精神欠陥(3)~(4)	叢 談	27-6~7	1923-3~4	心理
217	グラッケンパーリー	精神薄弱者ノ数	摘 録	27-7	1924-4	調査
218	ドクトル・ストッダー ト (桐原葆見抄訳)	不良性と精神欠陥(5)	叢 談	27-10	1924-7	心理
219	ムーアレーズ	先天性白痴ノ直接遺伝	摘 録	28-2	1924-11	医学
220	ナインド	癲癇児童ノ聴覚記憶範囲	摘 録	28-3	1924-12	心理
221	ドクトル・ハナウエル	促進学級児童	摘 録	28-4	1925-1	教育
222		アメリカにおける異常児童特別学級	摘 録	28-4	1925-1	教育
223		視力不完全より来る損失	摘 録	28-4	1925-1	教育
224	ゴルドン	遅滞児童ノ心性考査及知識考査	摘 録	28-5	1925-2	心理
225	マリー・エル・ジャッ クソン	学年別ナキ個人学校	摘 録	28-7	1925-4	教育
226	テイラー・フォックス	癲癇性児童ノ精神検査	摘 録	28-7	1925-4	心理
227	グラハム・ローレイ ン・テイラー	問題児童	叢 談	28-10	1925-7	児童
228	アルバート・エッチ・ ヒル	精神薄弱児童に対する教育施設(-)~(-)	叢 談	28-10 ~11	1925-7~8	教育
229	アルベルティニー	精神異常児童保護ニ対スル提案	摘 録	29-2	1925-11	教育
230	フェナルド, ワルタル 共述	劣等児童ノ保護	摘 録	29-4	1926-1	教育
231	グレー及マルスデン	智能係数ノ不変性ニ関シテ	摘 録	29-6	1926-3	心理
232	タム・アルフヒルド	成績不良ナル学校児童ノ研究	摘 録	29-6	1926-3	医学
233	デーレイ	初等学校程度ニ於ケル問題児童	摘 録	30-1	1926-4	児童
234	フェルマイレン	運動神経ノ虚弱ト痴鈍	摘 録	30-1	1926-4	医学
235	スイーテ	道徳的愚鈍	摘 録	30-1	1926-4	児童
236		精神低格者ノ処置	摘 録	30-1	1926-4	医学
237	ジュウェット, ブラン ハルド共述	知能検査ノ診断的意義	摘 録	30-2	1926-5	心理
238	ブツシュ	血族結婚ニ就テ	摘 録	30-2	1926-5	医学
239		仏蘭西に於ける補助学校	摘 録	30-2	1926-5	教育
240	エー・ツァバレロ (竹内薫兵抄)	酒精中毒ト変質	摘 録	30-4	1926-7	医学
241	ニッチュ	小学校ニ於ケル落第ノ原因	摘 録	30-11	1927-2	教育
242	ヨハンネス・レーゼ ル(富士川游抄)	異常児童ノ小学校退学	摘 録	31-2	1927-5	教育
243		北米合衆国に於ける精神薄弱者	摘 録	31-3	1927-6	社会
244	ブランチャード	最低生活者ノ児童ニ関スル社会, 心理学的調査	摘 録	31-4	1927-7	心理
245	ファムブリ (桐原葆見抄)	児童ノ直覚的数量判断	摘 録	31-6	1927-9	心理
246	カステラノ (桐原葆見抄)	智能, 活動性及ビ徳性間ノ関係	摘 録	31-6	1927-9	心理
247	ラフォラ	精神薄弱児童ノ教育	摘 録	31-6	1927-9	教育
248	ブランナム (桐原葆見抄)	精神薄弱不良児ノ分類	摘 録	31-10	1928-1	児童
249	ペーテルズ (桐原葆見抄)	異常児童ノ心理学的類型	摘 録	31-12	1928-3	心理
250	スタールネーカー (桐原葆見抄)	落第児童ニ関スル調査	摘 録	32-1	1928-4	児童
251	ドクトル・フォン・マ ディー(竹内薫兵抄)	精神異常児童ノ治療教育	摘 録	32-1	1928-4	教育
252	畑野慶治抄訳	北部アイルランドに於ける教育条令	摘 録	32-1	1928-4	教育

No	著者、抄録・抄訳者名	題 名	記 事 類 型	巻 号	発 行 年 月	分 類
253	ドクトル・アルフレッド・ツァング (月田寛抄)	職業弱ノ少年	雑 録	32-1~2	1928-4~5	社会
254	ジョンソン (桐原葆見抄)	教化困難児童トソノ特性	摘 録	32-3	1928-6	心理
255	レーモンド (桐原葆見抄)	魯鈍児童ノ智的発達	摘 録	32-4	1928-7	心理
256	富士川游	学校衛生の革新者シッキンゲル	叢 談	32-8~9	1928-11~12	教育
257	アイヘル(平塚俊亮抄)	異常頭蓋ノ成因	摘 録	32-10	1929-1	医学
258	英国バーミンハム市学校医官・ドクトル・ジー・エー・アウデン (加藤文子訳)	精神薄弱の範囲	摘 録	32-10	1929-1~2	児童
259	ボエーレン (桐原葆見抄)	補修学校ニ於ケル補助学級児童	摘 録	32-12	1929-3	教育
260	イルムガルト・メンデ (原田邦抄)	遺伝的聾啞者ノ家族ニ就テ	摘 録	33-1	1929-4	医学
261	グリーン(桐原葆見抄)	精神薄弱者ノ出産及ビ死亡率	摘 録	33-2	1929-5	医学
262	クゲンコ(平塚俊亮抄)	児童ノ特徴	摘 録	33-4	1929-7	心理
263	クルト(平塚俊亮抄)	遺尿ニ就テ	摘 録	33-4	1929-7	医学
264	モンロー(桐原葆見抄)	読方不能児ノ診断ト取扱	摘 録	33-7	1929-10	心理
265	ジュウェル (沼田米彦抄)	境界線上ノ精神薄弱児ノ精神発達	摘 録	33-8	1929-11	心理
266	アイゼンシュタイン (桐原葆見抄)	先天性精神薄弱ノ型	摘 録	33-8	1929-11	心理
267	デイトン(沼田米彦抄)	生出順位ト家族数	摘 録	33-9	1929-12	医学
268	ウィルデンスコフ	知能検査	摘 録	34-1	1930-4	心理
269	ヘングステンベルグ (桐原葆見抄)	教育上ヨリ見タル保護児童ノ定型ト性格ノ研究	摘 録	34-5	1930-8	児童
270	トーマス・ファーガソン (竹内薫兵抄)	精神薄弱ナル学校児童	摘 録	34-7	1930-10	教育
271	ホフマン(沼田米彦抄)	補助学校退学者ノ職業能力	摘 録	34-8	1930-11	教育
272	ロースリ・ウステリ (桐原葆見抄)	在院児童ノ精神状態	摘 録	34-10	1931-1	心理
273	独逸補助学校教師カー・ベル (月田寛訳)	補助学校に於ける意志教育	雑 録	34-11 ~12	1931-2~3	教育
274	デーヴィス (沼田米彦抄)	孤児ノ智能	摘 録	35-1	1931-4	心理
275	ゴールドン, トーマス, グリーンオール共述 (沼田米彦抄)	精神遅退児ノ不良化傾向	摘 録	35-3	1931-6	児童
276	ヒールシエル (高橋貞抄)	精神薄弱児童ノ身体	摘 録	35-5	1931-8	児童
277	ウィルソン (高瀬安貞抄)	錯誤, 困難性, 素質及ビ恰利ナル児童ト遲鈍ナル児童ノ学習速度	摘 録	35-9	1931-12	心理
278	ディモレスク及ティパレスク (高瀬安貞抄)	体質性精神低格者ノ遺伝ニ関スル研究	摘 録	35-9	1931-12	医学
279	ライネル(高瀬安貞抄)	学齡ニ於ケル低格の体質型	摘 録	35-9	1931-12	医学
280	フェレップ (高瀬安貞抄)	精神低能者ノ体格ニ連関シテ想像ト虚言トノ関係ヲ論ズ	摘 録	35-10	1932-1	医学
281	アルドリッチ, ドール 共述 (沼田米彦抄)	白痴ノ理解力実験	摘 録	35-12	1932-3	心理
282	チャムピ(高瀬安貞抄)	デムールノ徴候ニ関スル実験的研究	摘 録	36-2	1932-7	心理
283	テー・ギョット	児童ノ疾病ト精神ノ発達	摘 録	36-3	1932-9	医学
284	リチャーズ (高瀬安貞抄)	児童ノ精神衛生	摘 録	36-4	1932-11	医学

わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I

No.	著者、抄録・抄訳者名	題 名	記 事 類 型	巻 号	発 行 年 月	分 類
285	アダルベルト・グレゴ ル (富士川游抄)	保護院教育ノ任務	摘 録	36-4	1932-11	教育
286	ノイスタット・スタ インフェルド	世話の焼ける児		36-4	1932-11	児童
287		精神欠陥者の任意避妊	雑 報	36-4	1932-11	医学
288		異常児童問題	新 著	36-7	1933-1	児童
289	ヴェルフレル	学校衛生ノ範圍ニ於ケル精神異常児童	摘 録	36-6	1933-3	教育
290		低格者の撲滅	雑 報	36-6	1933-3	医学
291		異常児童の生長	雑 報	36-7	1933-5	児童
292	アー・ウエー・ブル ツク	児童ノ精神薄弱ノ優生学的意義	摘 録	36-8	1933-7	医学
293		治療教育の講習	雑 報	36-8	1933-7	調査
294		精神薄弱の優生学的意義	雑 報	36-8	1933-7	医学
295		精神薄弱の遺伝	雑 報	36-9	1933-9	医学
296	フェーアバンク	十七歳後の異常児童	摘 録	37-2	1934-1	児童
297	富士川游	児童教養欠陥の身体及び精神发育に対する意義 (プロフ エツソール ウエー・ビルク氏の所説)	摘 録	37-3	1934-3	教育
298		遺伝病後嗣予防法	摘 録	37-3	1934-3	医学
299	シユネールソーン	異常児童の社会性	摘 録	37-4	1934-5	心理
300	富士川游	遺伝生物学と教育 (独逸ロストック大学教授ハンス・ラ イテル氏所説)	摘 録	37-6	1934-9	医学
301		遺伝生物学的低格の児童	雑 報	37-8	1935-1	社会
302	チー・エー・ダンビ イ	智能の性的要素	摘 録	37-9	1935-3	心理
303	ベー・ケムケス	遺伝病と児童保護事業	摘 録	37-10	1935-5	社会
304	エリーザベット・ヘ ッケル	精神薄弱者に関する系譜学的研究	摘 録	37-10	1935-5	医学
305	フェルディナント・ヘ ルネル	ビネー検査法は今なほ保持し得べきか?	摘 録	37-11	1935-7	心理
306	エリーザベット・ク ノーブラオホ	甚しく精神薄弱な児童と正常な児童とに於ける視知覚の 比較研究	摘 録	37-11	1935-7	心理
307	ヘルベルト・オーレ ル	近親結婚が子孫に及ぼす影響	摘 録	37-12	1935-9	医学
308	富士川游	精神衛生と教育 [上・中・下] (テオドル・ヘルレル氏 所説)	摘 録	38-1~3	1935-11~ 1936-3	教育
309		精神欠陥者の保護	摘 録	38-2	1936-1	社会
310	エー・ハンハルト	劣等なる神経の徴候としての齟齬舌	摘 録	38-3	1936-3	医学
311	ユングミッヘル	犯罪家族	摘 録	38-4	1936-5	医学
312	アー・ユエダ	精神薄弱及び正常学童の子孫の数と精神状態	摘 録	38-4	1936-5	医学
313	ヴィルヘルム・ラン ゲ	治療的教育の新しい方法	摘 録	38-5	1936-7	教育
314	フランク・トールマ ン	学校における児童嚮導	摘 録	38-5	1936-7	心理
315	エリアノル・グリュ ック	精神発達遅滞と青少年の犯罪	摘 録	38-10	1937-5	児童
316	アルフレッド・ケー レル	機質的脳欠陥を有する児童に於ける感情の変化	摘 録	38-10	1937-5	医学
317		筋緊張性栄養障碍症に冒されたる家族の精神的变化	摘 録	38-10	1937-5	医学
318	ヴェルメイラン	ベルギーに於ける異常児童の精神衛生	摘 録	38-11	1937-7	社会
319	フェドロフ	知能遅滞の諸定型	摘 録	38-12	1937-9	心理
320	プロトゥニコウヴァ	知能の後れた児童における作業経過の特徴	摘 録	38-12	1937-9	心理
321	ゲー・シュヴァー プ	精神薄弱者を社会に編入する方法	摘 録	39-2	1938-1	社会
322	リッピ・フランチェ スコ コニ	ルッカ地方の児童精神病院	摘 録	39-3	1938-3	教育
323	ヨーゼフ・ヴェル テス	環境と児童精神	摘 録	39-5	1938-7	児童
324	ポール・ビート	低能児学校の効果	摘 録	39-6	1938-9	教育
325	エーリヒ・シュテ ルン	精神薄弱の原因	摘 録	39-8	1939-1	医学
326	フレデリク・パトリ	児童の知能と教育法との関係	摘 録	39-8	1939-1	教育
327	エム・トラーマー	児童の知能障碍・性格障碍に適合せる教育法	摘 録	39-8	1939-1	教育

No.	著者、抄録・抄訳者名	題 名	記 事 類 型	巻 号	発 行 年 月	分 類
328	レイモンド・キャテル	智能商の一般的低下が社会生活に及ぼす影響	摘 録	39-9	1939-3	児童
329	ジャック・ブリソー	通学と少年犯罪の予防	摘 録	39-12	1939-9	教育
330	トゥリュド・トゥロブ	教育困難児の図画の診断学的価値	摘 録	40-1	1939-11	心理
331	エム・ベユ	教育に於ける制裁	摘 録	40-2	1940-1	教育
332		ドイツに於ける奇形新生児の調査	雑 報	40-3	1940-3	調査
333	ジェー・エム・パート リジ	放浪児童	摘 録	40-5	1940-7	児童
334	シュレーダー	情緒生活の犯罪生物学的研究	摘 録	40-8	1941-1	児童
335	リュムケ	所謂小児神経症の療法	摘 録	40-9	1941-3	医学
336	クレアレット・アーム ストロング	少年犯罪者の神経病的反応	摘 録	40-12	1941-9	児童
337	ファン・デル・オルス ト	児童及び社会に対する特殊教育の意義	摘 録	41-2	1942-1	教育
338	ユーダ	軽度低能又は単純弱天才の遺伝価に就て	摘 録	41-3	1942-3	医学
339	オーエ	臨床上並びに遺伝生物学上の見地より見た「モンゴースムス	摘 録	41-6	1942-9	医学
340	シュトッケルト	児童期における精神病理学の問題	摘 録	41-7	1942-11	医学